

# 図書館報

88号 別冊

平成24年 3月27日発行

## 特集

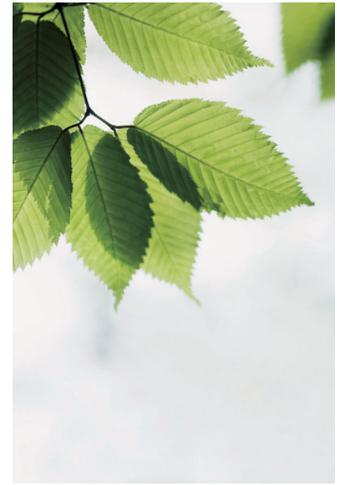
### 第4回北海道教育大学附属図書館 懸賞論文受賞作発表

#### 【優秀賞】

- |    |     |       |                 |
|----|-----|-------|-----------------|
| 02 | 小論文 | 小田 健太 | 寺山修司の短歌における「教師」 |
| 04 | 感想文 | 佐藤 由佳 | “運”と“幸運”        |
| 06 | 小説  | 佐伯はる香 | 梵（ラージャ）         |

#### 【佳作】

- |    |     |       |                                    |
|----|-----|-------|------------------------------------|
| 19 | 小論文 | 武田 拓也 | パフォーマンスとしてとらえる<br>「話すこと・聞くこと」とその指導 |
| 21 | 小論文 | 中村 望  | 『源氏物語』研究～女三宮論～                     |
| 29 | 感想文 | 谷口 彩  | 全ての出逢いに感謝すること                      |
| 31 | 小説  | 加藤 亞弓 | お兄ちゃんとの非日常                         |



表彰式

札幌館 | 旭川館  
函館館 | 釧路館

小論文部門 優秀賞

寺山修司の短歌における「教師」

小田 健太



一

寺山修司は一九三五年、青森県に生まれ、一九八三年、四七歳でこの世を去るまで、あらゆる分野に業績を残した。短歌・俳句を含む短詩型文学、散文、戯曲、あるいは映画のような映像作品など、多方面に才能を発揮した。とりわけ、演劇実験室「天井桟敷」を主宰したことはよく知られているだろう。

今年は寺山没後二十九年目にあたることになるが、近年、寺山に関する研究が進んできているという。堀江秀史「寺山修司研究の現在——没後二十五周年を経て——」（『比較文学・文化論集』第二十七号、二〇一〇）には、「本論では、研究対象としては未だ『若い』寺山に対して、これまでどのような研究が進められてきたのかをまとめると同時に、今後どのような研究の方向性が考えられるのかを検討したい」とあり、短詩型文学の研究に対しては次のような判断を下している。

生前より評価の高かった短詩型文学は、『全歌集』等と題して幾度か出版されており、資料的な準備が早く、様々な論が予ねてから展開されてきた。また、短歌、俳句に最も熱中した時期、十代の頃の伝記的、書誌的資料も一九九〇年代に整備が進んだ。先述した二〇〇〇年以降の文学館によ

る展览会も、この傾向に与している。つまり、短詩型文学に関する研究が、寺山研究の中で最も進んでいるのである。

確かに堀江氏の指摘するように、歌人・俳人や研究者によって、少なからぬ寺山短詩型文学論が書かれていくようである。だが、まだまだ研究されなければならない点は数多く残されている。拙論では寺山修司の短歌作品中、「教師」ということばに着目してみたい。テキストには、『寺山修司全歌集』（講談社、二〇一〇）と、田中未知氏によってまとめられた寺山の未発表歌集『月蝕書簡』（岩波書店、二〇〇八）を使用する。二書によって寺山の歌業を網羅的に把握できる。

二

寺山短歌には「教師」の語は九例見えている。次にそれらを掲出する。引用歌上部には便宜上、テキスト掲載順に算用数字を付し、下部の括弧内には、その歌が収められている歌群の小題を付した。なおルビは省略した。

1 罐に飼うメダカに日ざしさしながら

田舎教師の友は留守なり（「記憶する生」）

2 煙草くさき国語教師が言うときに

明日という語は最もかなし（「燃ゆる頬」）

3 五月なりラッキョウ鳴らし食うときも

教師とならん友を蔑む（「燃ゆる頬」）

4 一枚の羽根を帽子に挿せるのみ

田舎教師は飛ばない男（「夏美の歌」）

5 墓の子の跳躍いとおしむごとし

田舎教師に決まりし友は（「チエホフ祭」）

6 鯖一尾さかさに提げて帰りゆく教師を

しづかなる窓が待つ（「熱い茎」）

7 ある日わが貶めたりし教師のため

野茨摘まんことを思い出づ（「蜥蜴の時代」）

8 鰯雲なだれてくらき校廊にわれが瞞せし

女教師が待つ（「蜥蜴の時代」）

9 腋毛濃き家庭教師とおおむけに見ており

雲雀空に墜つまで（「蜥蜴の時代」）

1 は「教師」不在の状況を私たちの眼前に現出させる。取り立てて何かが起きることはない。わずかにメダカがさらさらと罐という小さな世界で泳ぎまわっている以外には、沈黙が歌の世界に漂っているのである。2 は、「教師」と「明日という語」とのイメージの懸隔が眼目となっている歌である。「明日」がひろく未知性を象徴しているとすれば、「教師」は既知性のイ

メージを背負うことになる。3には蔑む対象としての「教師」が詠じられている。上句は詠者の日常を象徴的に表すのであろうか。「ラッキョウ鳴らし」の「キョウ」と「し」が下句の「教師」と響き合う効果もあるだろう。蔑む対象である友が、「教師」であるとはわざわざ言わなければならなかったことに注目されよう。3同様、「蔑む」のような卑下のことばと共に「教師」が詠じられたものとして、7・8を挙げることができる。寺山短歌における「教師」は、蔑む、貶める、瞞す、という生硬な語彙で卑下される存在でもあったのだ。4・5は「田舎教師」という語が用いられている点で共通する。さらに、4には「羽根」・「飛ばない」、5には「跳躍」とあるように飛翔のモチーフを持つことでも両歌は通底している。6には「さかさ」の語が見えるが、同じ語を用いた歌に、例えば次のようなものがある。

扉のまえにさかさに薔薇をさげ持ちてわれあり  
夜は唇熱く（「真夏の死」）

6に「教師」以外の人物が登場しないのと同様に、右の歌にも「われ」以外の人物は直接的には描かれなない。しかし、明らかに直後に対面するであろう人物（この場合、恋人であろうか）の存在が背景に潜んでいる点で、6との相違を呈している。9に「教師」とともに詠じられた雲雀は寺山の好んだ景物であり、「うしろ手に墜ちし雲雀をにぎりしめ君のピアノを窓より覗く（「蜥蜴の時代」）」のような例が挙げられる。下句の「空に墜つ」は修辭的にねじれた表現であるが、空中に上昇すること、地面に落下することを交錯させた措辞と解釈できようか。

以上九首が、寺山短歌における「教師」の全用例である。

## 三

前節で確認したように、寺山短歌にあらわれた「教師」は、ときに不在であり、ときに飛翔のモチーフと取り合わせられ、ときに卑下の対象でもあった。「教師」の用例は決して多いとは言えないが、多様なイメージの下に詠じられていることは間違いない。

このような「教師」詠が成立した背景として、寺山が「教師」をどのように捉えていたか、ということが問題となる。それを示す資料の一つとして、『ほんとうの教育者とは問われて』（朝日新聞社、一九七二）を挙げる事ができる。本書は、朝日新聞に連載された同題の記事をまとめたもので、知名人一〇七人の理想の教育者像が語られている。そのうちの一人として寺山も執筆しているのである。多くの執筆者が自身の恩師や歴史人物を理想の教育者として挙げている中で寺山は、「私自身」と題し、「市井の万事が教師」とも言う。また、次のような記述にも注目される。

私は、すぐれた教育技術者によって人間が作られてゆくという発想から遠く離れて教育を考えている。よき対話者としての父もなければ、鑑とするだけの教師ともめぐりあわなかった。

寺山が自身の伝記的事実をしばしば歪曲していたことはつとに知られるところであり（例えば田澤拓也『虚人 寺山修司伝』を参照のこと）、こうした発言も額面通りには受け取れないかもしれない。そうであるとしても、こうした一種の「教師」不信の考えの吐露と、短歌中に描かれた「教師」の間の共通点を見逃すことはできないのではないか。「鑑」とすべき「教師」に出会うことのなかった寺山は、街中に「学校」を発見するようになっていく。前掲書中の彼の言に借りれば、「居酒屋」に、「野球場」に、「ダンスホール」に学校

的機能を見出すようになるのだ。こうした記事を念頭に置きながら前節の「教師」詠を読み返すことが許されるならば、例えば1に表現された「教師」不在は、現実世界の詠者である寺山にとつての範とすべき「教師」の不在を示しているとは言えないだろうか（その「教師」が「友」であることは今は措くとして）。さらに「教師」は飛翔を否定され、蔑まれ、貶められ、瞞される存在ともなっていくのである。

ここに至って私たちは、多感な時期にさしかかった少年が、注目をあつめるためにあえてそうするような悪態を看取できないだろうか。寺山にとつて、「教師」を卑下することと、精神を充足させる「教師」の出現を待望することとは、同等のエネルギーを有しており、また表裏をなすものでもあったのだろう。「鑑」とするだけの教師」と出会うか否かによって容易に反転し得る不安定な精神が一連の歌群に潜在しているように見えるのである。寺山「教師」詠は、ついに心を許すべき「教師」と出会うことのなかった者の不満を投影した、不逞な悪態の歌としての側面が強いと言えるのではなからうか。ただしその裏側に慕うべき「教師」出現への切望を込めて。

寺山の短歌は、伝統的な花鳥風月の美々しさを詠じることに傾かない。近代的なテーマを閉じ込めたところに彼の歌業の最大の特徴があるとも思われるのである。「教師」詠もそうした寺山短歌独自の側面の一端を示しているのではないだろうか。

（おだ けんた・大学院教育学研究科）

感想文部門 優秀賞

“運”と“幸運”

佐藤 由佳



私が『Good Luck』（アレックス・ロビラ著）という本を初めて手に取ったのは、小学生の頃でした。その時も読書感想文でこの本を取り上げたことを今でも覚えています。幼いながらもこの本と出会ったことで大きな影響を受けました。私にとってこの本は悩んだり、つまずいたり、辛いとき、どうするべきかを教えてくれ、道しるべとなった特別な一冊です。就職活動というこれからの人生を左右する大切な時期となった今だからこそ改めて読書感想文として書きたいと思いました。

五十四年ぶりの再会を果たした、幼馴染のジムとマックス。仕事も、財産も失い嘆いているジムに、マックスは祖父から聞いた「魅惑の森」の物語をはじめます。

それは、はるか昔平和に満ちていた王国の物語。己の力を発揮する機会がなく不満を募らせていた騎士たちに、宮廷魔術師のマーリンは七日目の朝に魅惑の森に生える幸運をもたらす「魔法のクローバー」の話をもちかけます。王国中の町を合わせたより広い森の中で一本のクローバーを見つけ出す、そんな並大抵ではないことに皆が次々諦め去っていく中、黒いマントの

騎士サー・ノットと、白いマントの騎士サー・シドが名乗りを上げ、森を目指します。

森へ着いた二人は、魔法のクローバーの情報を得るため、大地の王ノーム、湖の女王、木々の女王セコイア、石の母ストンの元を訪れます。しかし誰に聞いても「魅惑の森に魔法のクローバーは生えない」との答え。落胆したノットは偶然見つかる可能性があるかもしれないと森の中を歩きまわり、一方シドは魔法のクローバーが生えない理由を追求し、土を運び耕し、湖の女王に手を貸し水を引き、光を得るため夜を徹して枝を落とし、小石を拾い上げ、魔法のクローバーが生える下ごしらえをします。

魔法のクローバーが生える前日、森をさまようことに疲れマーリンの話は嘘だったのではないかと疑い絶望するノットの元へ魔女モナガルが現れ、魔法のクローバーのありかを教える代わりにマーリンの息の根を止めるという取引を持ち出します。「魔法のクローバーは森には生えない。マーリンのいる城に生える。そのため騎士たちを城から遠ざけようとしたのだ。」それを信じたノットは怒り狂い、急いで城に向かいます。そして、まんまとノットを騙すことに成功したモナガルはシドの元へ向かいシドをも騙そうとするが、

今まで国を良い方向へ導いてきたマーリン、そしてこれまでの自分の努力を信じたシドはモナガルを追い返します。

翌日、魔法のクローバーが生えるのを待ち続けると、突然緑の雨が降り出します。これは毎年国中に降る人々の悩みの種でしたが、それこそが魔法のクローバーの種だったので。しかし、魔法のクローバーが生えたのは広い王国の中で、シドが土を敷き、水を引き、日光を当て、石ころを取り除いたほんのちっぽけな場所だけだったので。

マーリンを殺そうとし、城へ戻ったノットはモナガルの話が嘘だと知ると呆然とし、城を去ります。その翌日城へ戻ったシドにマーリンは言う。「そなたが幸運をつかむことができたのは、そなた自ら幸運を招こうと下ごしらえをしたからだ。わたしがしたことは、そなたを森へと向かわせたただけだ。つまり、自分自身が幸運の一部となることを、そなたは本心から願ったということだ。」

マーリンに別れを告げたシドは、自分の手にした幸運の物語を人々に話聞かせ、王国中を旅してまわった。これはシドにとって新たな下ごしらえの始まりであった。

幸運の下ごしらえは自分にしかできない。幸運の下ごしらえは今すぐに始めることができる。幸運のストーリーは絶対に偶然には訪れない。

人は誰しも幸運を望みます。しかし物語のノットのようにできるだけ自分は何もせず、できるだけ楽をして幸運をつかみたい、私も度々そう思うことがあります。しかし、「運は呼び込むことも引き寄せることも出来ない。幸運は自らの手で作り出せば永遠に尽きることはない。」とあるように、何もせず偶然願いが叶ったとしてもそれは「運」であり、一度きりのもの。しかし自分努力し、苦勞し、作り出した「幸運」は一生ものだと知りました。

「誰もが幸運を手に入れたがるが自ら追い求めるのはほんのひとにぎり。」とあるように、自ら行動を起こさなければ結果は得られないということは当たり前だと分かっている半面、なかなか行動できずにいます。しかし、努力するのが面倒でも、失敗するのが怖くても、「幸運が訪れないからには訪れないだけの理由がある。幸運をつかむためには自ら下ごしらえをする必要がある。」というように待っているだけでは決して幸運をつかみ取ることはできない、望むだけではなく自ら行動しなければならぬと改めて考えさせられました。そして、「欲するばかりでは幸運は手に入らない。幸運を呼び込むひとつのカギは人に手を差し伸べられる広い心。」「自分の知っていることが全てとは限らない。幸運をつかむにはあらゆる可能性に目を向けなくてはならない。」とあるように、自分の幸運のことだけを考えるのではなく、困っている人には手を差し伸べ、人の話に耳を傾け、広い視野と広い心を持つことの大切さを感じました。「下ごしらえを先延ばしにし

てしまえば幸運は絶対に訪れてはくれない。どんなに大変でも今日できることは今日してしまおうこと。」やろうやろうとは思っていても、明日でいいや、今はやらなくていいや、そう思って面倒事は先延ばしにしてしまうことが多いですが、今できることを先延ばしにしてしまったら、もつと他のやるべきことに気がつかず、自分の納得のいく結果にはならず、無難に終わってしまいます。

この物語のように、幸運をつかむチャンスは誰にでも平等に、同じように与えられます。しかし、それ得のいく結果になり幸運や成功をつかむ人はほんのひとにぎり、それは与えられたチャンス、つまり「運」を「幸運」に変えられた人であり、最後まで努力し続け、自分を信じ続けることができた人だと考えるようになります。「偶然しか信じぬものは、下ごしらえするものを笑う。下ごしらえするものは、何も気にしなくていい。」とあるように、時に努力している姿を見て「そんなことで頑張らなくていいのに」と笑い、馬鹿にする人がいても、それは一時の、自分の意志では引き寄せられない偶然の「運」を待つの、またはその「運」さえも諦めているものであり、下ごしらえするものは何も気にせず、努力し続けなければならないものにはのらずにやれることを全てやったらあとはいじっと待てばいい。

これらは今の私たちにとっても、あらゆる場面で言えることだと思います。勉強や課題、部活、就職活動、友人関係、家族関係、あらゆる場面で行き詰ったり、逃げ出したくなったりしたとき、楽をしようとする自分に言い聞かせるため、私はこの本を手に取りました。たとえ努力が直接結果に結び付かなかつたとしても、それまでの努力はいつか自分へ返ってくる、たまたま

つかみ取った成功よりも何倍も価値があるものだと知りました。

「この本を書くのには八時間しかかからなかった。だが、この本を考えるのには三年もの月日がかかった。人はもしかしたら『たった八時間か』と思うかもしれない。だがもしかしたら『三年もかかったのか』と思うかもしれない。前者は幸運の訪れを待つ者たちのこと。後者は幸運への下ごしらえをできる者たちのこと。筆者があとがきとして書いたものです。この一冊を書きあげたという八時間よりも、完成させるまでにかけた三年もの過程が大切だと、そう思える人が幸運をつかみ取れるとあります。今、自分はどのような努力をしているのだろうか、将来役に立たないかもしれないのにも思い悩んでも、決してそれは無駄な努力ではなく、自分の可能性を広げ、ステップアップし、成功をつかみ取るための下ごしらえだと信じ続けることが大切だと感じました。

この先何度つまづくことがあっても、この一冊で学んだことを常に心に留め、努力し続けられる人になりたいと思います。最後に、幸運のストーリーを人々に話聞かせ、幸運を分け与えたシドのように、この読書感想文を書くことで私にとっても新たな下ごしらえの始まりなることを信じます。

(さとう ゆか・函館校三年)

## 小説部門 優秀賞

## 梵（ラージャ）

佐伯 はる香



## プロローグ

漆黒の地に、金銀を基調とした数多の線で、美しく綴が描かれた豪華な棺。その中に色とりどりの造花が敷き詰められ、純白のドレスを纏ったラージャが横たわっていた。

ロキはラージャを見下ろした後、自分の横にいるリアを見やった。リアはラージャの弟だ。幼い頃はラージャと同じ翡翠のような青い瞳を持っていたリアが羨ましくて、空のように青い自分の瞳を呪ったことすらあった。

あの頃と違って、ラージャが笑いかけてくれることはないけれど。

「やっど、会えたな」

ロキは誰もが認める青年になった。顔つきは大人びて、すらりとした長身は街行く女性達の憧れの的である。しかしこの姿のロキを、ラージャは知らない。

それでも昔から変わることのなかった愛しさを抱いて、ロキは優しい言葉を贈った。

## 第一章 平民王女と〈眠りの病〉

ラージャは七歳の誕生日に、次の王女となるべく王

宮に召された。この国では国王に御子が生まれない場合、王女と同じ誕生日の子供を養子に迎えることになっていくのだ。

この国にはラージャと同じ誕生日の子どもは沢山いたはずなのに、とリアは泣いた。ロキも同じように思っていたが、一方でラージャが選ばれるのは仕方ない、と悟っていた。同年代の子ども達の中ではラージャは抜きん出て可愛らしかったし、勉強もよく出来た。何はともあれロキは八歳で幼馴染みを失い、リアは五歳で姉を失った。

ラージャが王女になってからは、一度としてラージャを見たことはなかった。テレビに映るのは「ラージャ様」であり、平民が謁見することは許されぬ至高の身分の者だった。血の繋がりがあってもリアですら、同じだった。

しかしラージャが〈就任の儀〉を終える後も、ロキは平民としての生活を変えることはなかった。ラージャと違って、変える理由などなかった。国民学校に通い、休日は家族と楽しく過ごし、時にはリアの家族とも交流した。リアはいつになっても良い遊び相手だった。また後々になってラージャが初恋であったと気づきはするが、クラスメイトと色事を楽しむこともあった。

そんな平穏な暮らしが壊れたのは六年後、ラージャが十三歳になった時だった。隣国が突如としてこの国

に攻め込んで来て、戦争になったのである。ラージャはまだ幼さを残したあどけない様子だったが、戦争の指揮者として軍部の重鎮と共に名を連ねることになった。国民皆兵を告げるラージャの映像が連日流れ、国は戦争一色に染まっていった。ロキ達は幾度となく前日まで遊び相手だった青年達を、万歳を叫びながら兵士として見送った。

事態はまだまだ暗転する。ラージャの十四歳の誕生日に、儉約国家を切り詰めた中で行なわれた〈生誕の儀〉のことである。義理の父親である国王の祝福の言葉を聞きながら、ラージャはその場に崩れ落ちた。忽然と眠ってしまったのだ。

そして、目覚めなくなった。

王国の歴史に例のない、〈眠りの病〉だった。戦時下にも関わらず多額の国費が投入されて医師団が組織されたが、原因は不明のままだった。治療方法など、勿論見つからなかった。その果ては、なし崩し的な敗戦である。

だが隣国は完全なる冷血ではなかったらしい。王宮に収められていた宝物を幾つか受け取っただけに留め、平民に手を出すことはなかった。加えて医療支援金と、あの棺をラージャの十五歳の〈生誕の儀〉に贈ってきた。その神々しい棺によって、ラージャは眠ったままにして、更なる崇拜を集めることになった。

現在、ラージャは眠ったまま国を治めている。

「ロキ殿、リア殿、ラー ज्याとの面会はどうかだったかね？」

「ここは青の國の中心部に位置する王宮である。《謁見の間》にて、ロキとリアは国王と彼の妻に直面していた。彼らがラー ज्याの義理の両親だ。」

「何故このようなことになったのかと言うと、突然ロキとリアの家に王宮から《宣下の文》が届いたのである。そこにはラー ज्याに会いに来るように、そのまま王宮に住み込むように、とだけ記されていた。」

「何が何だかわからないまま慌てて準備を始めると、タイムリングを計ったかのように国王の使者が現れた。彼らは一人につき一台の馬車を用意するから、そこに積めるだけの荷物を作れとしか言わなかった。」

「ラー ज्या様は本当に眠っていらっしやるのですね。今にも目覚めそうにも見えて、不思議としか言いようがありません」

「ロキは細心の注意を払いながら答える。ロキの中にあるラー ज्याの記憶は大して多くはないし、臆にしか思い出せないところは多い。ついついの外れなことを申し上げてしまうかもしれない。」

「それにラー ज्याと自分を引き離れた国王に、多少の反感を抱いていた。不敬が顔に出るのではないかと、ロキは内心で焦っていた。」

「かしこまらなくて良い。ラー ज्याの最愛の殿方と弟君を、言葉の一つや二つで無礼などにはせん」

「最愛の殿方……でしょうか？」

「ロキの肩が震えた。ラー ज्याはこの八年間、ロキへの想いを断つていなかったというのか。二度と会うことが出来ない、わかっていながら。」

「侍女が聞いておったそうさ。寝物語に、な。だからこそ、ロキ殿、そなたを呼んだのだ。どの医術も呪術も効能を見せなかった今、わしらにはそなたに継ぐ他ない」

「恐れながら申し上げますが……」

「ずっと黙っていたリアが口を開く。ラー ज्याによく

似たリアは、王宮ではロキよりも注目されていた。

「私がここに召された理由は、ロキと同じ役割を果たすと思われたからですか？」

「ラー ज्याはロキ殿とリア殿と、三人で仲良くしていたのである。ラー ज्याが王女になるまでは」

「戦争が始まる数年前、ラー ज्याの《生誕の儀》に参加した際にちらりと見た国王は、壮健な男だった。だが今となっては瘦せて、皺も白髪も増えてしまっている。勝利に喜び、とかく国を榮えさせようと声を大にして放つ隣国の王とは大違いだ。」

「聡いのだろう、リア殿は。ラー ज्याによく似ておられるからな。もしかしたら、もしかしたらだが、そなたはラー ज्याの《眠りの病》を治す妙手なるものを見つかるかもしれない。や、見つけれなくても仕方ないのだが……」

「国王は大きく息をついた。細くなつてしまった顔には慈愛が満ちており、それは父性愛としか表しようがない。ロキは考えを改めることにした。」

「ロキ殿、リア殿、ラー ज्याの病の原因を、そして治療法を探してくれ。必要なものがあれば何でも用意しよう。今日からそなたらは特別待遇であるからな。どうか、どうか……」

「ロキとリアは揃って頷くと、立ち上がった。国王は胸が詰まってそれ以上の言葉を出せないようだったのだ。《謁見の間》を退くことにした。二人は一礼すると、背後で控えていたらしい召使について部屋を出た。今日からラー ज्याの召使と侍女は、ロキとリアを含めた三人の召使と侍女である。」

「しかし、ロキもリアも召使に付き纏われることを是と思わなかった。召使よりも格調高い扱いを受け、ラー ज्याの浴室や寝所も共にしていた侍女も同様である。《謁見の間》を出たところで二人はその旨を大臣に申し上げ、召使は寄宿舎に、侍女はラー ज्याの部屋の近くに小さな控え部屋を与えられていたので、そこに返すことにした。」

「長い長い廊下を召使に先導されて、先程のラー ज्या

の部屋に着く。ロキとリアの背後からは、侍女達が足音を立てずについて来る。ここまで来るには、幾つもの部屋を通り過ぎ、幾度も幾度も廊下を右に左に折れる。王宮は広すぎるので、移動には誰か道案内が必要になるだろう。それをロキが召使に伝えると、彼は深々とお辞儀をした。何という待遇だろう。」

「ロキが先にラー ज्याの部屋に入り、リアが扉を閉めようとすると、召使がそれを止めた。リアに扉から離れるように促すと、両手を添えて彼が扉を閉めてくれる。彼が扉を閉め切るまで、その他の召使はお辞儀を続けていた。」

「姉さんは俺と同じ平民だったのに、こんなことになつていたとはな」

「ラー ज्याの部屋で三人になって初めて、リアは普段の口調で話し出した。ロキは年上であるが兄のように近い存在なので、彼に対するリアの話し方には屈託がない。」

「対するロキも、リアが相手だと心を許すことが出来る。ラー ज्याがいなくなつてからのロキは、親よりも誰よりもリアを信頼していた。」

「最初は我慢ならなかっただろうな。平民は誰にも庇護を受けない、誰かにかしづかれることもない。そんな生活から一転、王女様になったのだから」

「ロキは姉さんのことをわかつてるな」

「リアだつてこのくらいはわかつているだろう。だがな、ラー ज्याがこの部屋で何を考えていたかは全くわからない。他人の感情を読む術なんて、俺は持ち合わせていないのだから」

「リアが頷くと、瞳と同じ色をした髪の毛がさらりと揺れた。この国の民は、色合いはそれぞれだが誰もが青い髪と瞳を持っている。」

「ロキ、これからどうするつもりだ？」

「まずはここでラー ज्याと暮らせばいいだろう。国王が許してくれたのだから、思う存分ラー ज्याと過ごすさ。そのうちラー ज्याについて何かわかるかもしれない」

「何もなかったら？」

「……帰るしかないだろうな。だが俺は、ここを追い出されるまでは、ラー ज्याの傍にいる」

その決心が揺らぐことはないだろう。ラー ज्याの元に参る〈宣下の文〉を受け取った時、ロキは身の回りを整理してから来た。その様子を見ていたから、リアは迷わずロキに付いて来た。

彼を支えるため、リアは笑顔を見せた。

「賛成、だ。そうと決まれば夕食にしよう。召使がやきまきしているはずだし。テーブルを棺の横に運ぼうぜ。美味しい飯の匂いで姉さんが目覚めるかもしれない」

「ああ」

侍女に用件を伝えると、すぐさま食事の用意がされた。このような待遇に、ロキとリアはすぐに気詰まりしてしまっただろう。不足はないはずなのに、どこかが不服。何とも矛盾を孕んだ生活だ。

食事は美味しかったが、満足した感じはなかった。それでも二人は感謝の意を表さなければならぬし、それに対して侍女と召使は平伏しなければいけない。それが王宮という場所だ。

それから背中を流すという召使の申し出を断って、ロキとリアは二人で使うには広すぎる浴室を使った。入浴後は今まで触れたことのないような肌触りの良いバスローブを纏って、同じく高級であるベッドで眠った。

ロキとリアは目覚めると、まず身仕度を整える。ラー ज्याの部屋には二人のために毎日違う衣服が用意されるので、それを着る。体にびったりとしたタキシードだ。部屋の外に出る時には、正装としてマントを加えなければならない。

食事は侍女に申しつけて、部屋に用意してもらおう。王宮には〈食事の間〉があり、普段ラー ज्याはそこを利用していたらしいが、二人には国王や親王、大臣達と食事をするのは躊躇われたのだ。そこで週に一度、

日曜日の夕食を共にするだけに留めてもらうことにした。

日中は書物を読んで過ごす。王宮には国内からありとあらゆる美術書や呪術書が集められていたし、国立図書館を利用することも出来たので、ない本はなかった。ここに来るまでは国民学校の高等科にいた二人にとっては勉強など苦にならなかったし、打ち解けてきてわかったことなのだが、召使の中には良き師となるべき者もいた。二人は高等学校で習うべきものをここで教わり、卒業を認めてもらえるように計らった。

時には王宮の中庭で体を動かすこともあった。二人に仕えることが仕事の召使達は、良き対戦相手だ。二人が幼い頃から慣れ親しんだ遊びを、宮中にいるとは思えないほど無邪気に楽しんだ。

時にはラー ज्याの棺が中庭に運び出されて、ロキやリアに声援を送る侍女達と共に太陽の光を浴びた。国王や妻がラー ज्याの隣に座って、平民の遊びに目を細め、楽しそうに観戦していることもあった。そうしているとは本当に血の繋がった仲睦まじい家族に見えるから、不思議なものである。

少しずつ、ロキとリアとラー ज्याの暮らしは落ち着いてきた。

そうしていくうちに、月の輪が一周する。

## 第二章 愛する者との共鳴

ある夜中、リアは目覚めた。隣のベッドにいるロキを起こさないように、寝所を抜け出す。室内靴を履いて大理石の床を歩き、台所に向かった。食事は召使に用意させるにも関わらず、ラー ज्याの部屋には小料理屋ほどの調理場があるのだ。

食器棚からグラスを出して、水を注ぐ。薄い桃色のグラスは、月光に照らされて煌めいた。きつとラー ज्याが使っていたものだろう。ラー ज्याと共に暮らしたの

は五年、リアに物心がついていなかった頃を差し引くと、一緒に過ごした記憶は僅かだ。それでも何となく、姉のことだから、わかる。

その時、リアは動きを止めた。

棺を見つめる。

月光に照らされたラー ज्याは美しかった。けれど、何かが違う。ラー ज्याを見つめて、リアは一人頷いた。月の光よりも、太陽の光がいい。棺を台車で引つ張って中庭に連れて行ったときの方が、彼女は素敵だった。

「……おやすみなさい」

リアはもう一度ラー ज्याを見やり、寝室に戻った。

侍女がラー ज्याを抱き上げてソファーに移動させ、ロキとリアが棺の花を出す。造花は枯れることなく鮮やかな色を放っているが、季節に応じて替えてやることにした。ロキの発案である。

「どんな美術も呪術も効果を表さなかった今、それ以外の方法を試してみるべきでしょう」

ロキはそう言いながら、手を動かしている。〈眠りの病〉に対して何の手を打てなかった医師団は、黙ってロキの話を聞く。ロキとリアはラー ज्याに近い者であることから、初めから宮中で一目置かれていた。けれども彼らが落ち着き払い、格調高い雰囲気醸し出せば出すほど、彼らを見る目は変わってきた。

「私とリアが中庭に行く際にラー ज्याを連れていくこと、私とリアがラー ज्याの横で食事をとること、これらも効果をもたらすかはわかりませんが、やってみないことには何も言えません。そのようなことは、王宮で行われてはこなかったはずですから」

棺から全ての花を出し終えると、リアは一本一本を念入りに触っては、花びらの裏までも見ていった。花入れを手伝わないのかとロキは尋ねたくなったが、結局は何も言わなかった。リアのことだ、何か考えていることがあるのだろう。

「——ロキ」

しばらくしてから、リアは重々しく口を開いた。やはり思うところがあったのだ。リアは数本の花を差し出した。ロキは受け取り、目を見張る。

「……折れている」

「自然に折れるものじゃないだろう、これってさ」

ロキはリアの目を見つめ、すぐに首を振った。こいつが自分をからかおうと、今ここで折ったはずはない。リアはロキの一番の遊び相手で、学校でも朗らかな人気者であるが、こんなときに嘘をついて茶化すような者ではない。

「お前達か？」

ロキは侍女と召使の方を見た。彼らはビクリと肩を震わせて、お互いの顔を見合わせた。しかし、誰も何も言わない。

やがて、一人の侍女が進み出た。彼女は他の侍女のように困ったからといって、髪を触ったり白いエプロンを握ったりしない。わからないならわからないと、正直に答える女だ。

「私達がラー ज्या様にそのような粗相をするはずは、絶対にございませぬ。それにラー ज्या様の御身に触れる際には、最低でも侍女か召使が五人ばかり付き添い、そして今はロキ様とリア様もいらっしゃるのです。不審なことがあっても、誰かが気付くことでしよう」

ロキは頷いた。今までの侍女や召使の手つきには不審なところはなかったからだ。リアも頷いている。

「俺はあなたの言葉の真偽を疑ったりしないよ。だってこいつは姉さんが折ったものだから」

一瞬の無音の後、どよめいた。

ロキも侍女も召使も、目や口を開いている。ある者は絶句し、ある者は何か騒いでいた。先程までは黙って後ろの方に固まっていた医師団も同様である。

リアは、皆が自分の話を聞く状態になるまで静かに待っていた。

「数日前、夜中に水を飲みに起きた時のことでした。月光が部屋に差し込んで、姉さんはとても美しく見えた。」

……なのですが、何か動いた気がしたのです」

「リア！ラー ज्याが起きたと言うのか！？」

ロキは思わずリアに掴み掛かりそうになった。それでもどうにか抑えこむ。リアが大事なことを伏せていたことに怒ったのではない。自分がラー ज्याの変化に気が付かなかったことに、自分で自分に憤っていたのである。

「姉さんが動いたかどうかは、確証を持ってなかった。だからロキを起すのはどうかと思って、様子を見ることにしたんだ。まさかここで明かせるとは思わなかったよ」

ロキはリアを見つめ、彼に悪気がないことを確認した。それからラー ज्याが折ったらしい花をよくよく観察する。気が済むまでかなりの時間がかかったが、ロキを取り巻く人々は彼のことを静かに待っていた。

ロキは大きく息をついてから、次の指示を出す。そのとき侍女も召使も右手を胸に当て、ロキに服従を示す伝統的な構えを整えていた。

「部屋の模様替えをしよう。棺の横の食卓テーブルと椅子をどけて、代わりにそのソファアを持ってきてくれ。そっちにあるソファアもここに」

ロキは先程の侍女を呼ぶ。彼女は侍女達の中では一番のしつかり者だ。

「事の次第を国王に伝えてくれ。いいね、伝えるだけだ。様子を見たいなどと言っても連れて来てはいけない。今の状況がラー ज्याにとって良いのなら、それを壊したくない」

「わかりました、ロキ様」

「事態が好転したら会わせると、それも付け加えておいてくれ」

彼女は足早に部屋を横切り、扉を開ける。そこにきて彼女は侍女と医師団に部屋を去るように指示を出し、部屋には家具を動かす召使が残った。

部屋が整うと、召使達が一礼して部屋を出ていく。ロキとリアだけがラー ज्याの横に立っていた。急に静まりかえった部屋でロキとリアは、時計を確認したり、

部屋の中をうろついたりして、落ち着かない時間を過ごすことになった。

そして、真夜中。

ロキとリアは寝室のベッドに劣らない、豪華なソファアに横たわっていた。今日からここで夜を明かすのである。

リアの目は冴えていたが、ロキはうとうとしてばかりだった。リアが何度も声をかけても、時折肩を叩きに行ったところで、眠そうな様子は変わらない。ラー ज्याにあれほど入れ込んでいたにも関わらず、だ。

やがてロキは眠ってしまった。リアはロキに毛布をかけてやる。穏やかな寝顔、規則的な寝息。ぐっすりだ。これを起こせと言われても、気が咎めてしまう。

……でも。

ロキとリアが小さい頃は、どちらかの親に用事があったりすると、相手の家に泊りに行っていた。そんなときリアはロキと同じ部屋を使わせてもらった。夜中にリアが少しでもぐずったりすると、ロキが飛んできてくれた。一度はリアがひどく熱を出していたことがあって、ロキが気づいてくれなければ大事になるところだったこともある。

そんなロキが、あれだけ起こそうとしていたリアを無視して眠ってしまうことがあるだろうか。

リアは息を吐いた。硬直していた喉をぐくりと動かし、棺の方を見る。ロキが普通ではないというのは、こちららも普通とは違うことが起こっても仕方ないというところで……

「こんばんは、リア」

ラー ज्याがゆっくりと、その体を起こした。造花がぱきぱきと音を立てる。

リアは足元から崩れ落ちそうになった。ロキが隣にいてくれれば、何と心強かったことだろう。よろよろ

と自分が使っていた方のソファアに戻り、ソファアが軋む音を遠くに感じながら座り込む。

「……こんばんは。お久しぶりです」

「あら、毎日私の顔を見ていたのに久しぶりなの？」

「久しぶりだよ、こうやって話すのなんて。で、何なの？まさかずっと前から起きていたの？」

「違うわ」

はつきりと否定して、ラー ज्याはロキの方を見やる。

ロキは相変わらず眠っている。

「私はね、ロキが眠っている間しか起きていられないのよ」

「どういうこと？」

「リア、私達のような〈青の国〉の人々は〈夜の民〉と呼ばれているわね。そして隣国の、〈金の国〉の人々は〈昼の民〉。

それでね、よく見て。私の目は、〈昼の民〉と同じ金色になっているのよ」

リアはぼかんと口を開けた。ラー ज्याが唐突に話し始めたからではない。ラー ज्याが言う通り、彼女が目を開いて初めてわかったのだが、確かに彼女の瞳には金色が煌めいていた。

「……姉さん、〈昼の民〉になったの？」

「なつたと言うか、もともとそういうものじゃない。リアだって、そうでしょう」

「え？」

「聞いてなかったの？」

ラー ज्याは目を見開いた。青い前髪が臉にかかっているが、ラー ज्याの瞳は髪の毛の隙間からでも明らかに、金色である。

「リア、どうして私達にお父さんがいなかったと思う？どうしてお母さんが私達をロキの家に預けて出かけたと思う？その上で私は、どうして私は昼の民になってしまったのでしょうか？」

リアはこの答えを、なぞなぞのように容易に導くことが出来た。その答えはそのような軽いものとは全く違ったけれど、ともかくリアはすぐさま答えを出し

て、告げる。

「俺達の親父は〈昼の民〉だった」

「〈青の国〉の人々が〈夜の民〉、〈金の国〉の人々が〈昼の民〉と呼ばれる理由は、髪と目の色だけではない。活動する時間が正反対であることも由来の一つなの。

二つの国は隣国と言われても距離は結構あるから、太陽と月が巡る時間は違うのよ」

「だったら何で親父達は結婚したんだよ。一緒に暮らせるはずがないじゃないか」

「だから一緒に暮らしてなかったの。愛し合ってはいたけれど、仕方ないものは仕方ないじゃない。お父さんは〈金の国〉、お母さんは〈青の国〉に分かれないうと、

ちゃんとした生活が出来ないでしょう。お母さんによく似た私達は〈夜の民〉になつたけどね」

リアは叫び出しそうになった衝動を抑え、拳を握り締めた。隠されていた真実、今まで見つけられなかった事実、何故自分はそれを知ることがなかったのだろう。

「姉さん」

「何？」

「つまり姉さんは〈眠りの病〉なんてものにかかっていない。というか〈眠りの病〉なんてものは存在しない。ただ昼と夜が逆転しただけなのか」

「そうよ」

リアは啞然とした。そんなことが現実に起こるなんて、どうにも信じられない。

「……あれ？」

リアは首を傾げた。

「さつきロキの眠っている間しか起きていられないって言っていたけど、あれはどういうこと？」

「あのね、眠り始めた私は沢山の夢を見たの。それは二つの民族が混ざり合って、見た目は〈夜の民〉のくせに、体は〈昼の民〉である中途半端者への、ただ一つのアドバンテージ。夢を見ることで、私は世界の何もかも知ることができるようになったわ。そうね、便宜で〈神憑き〉とでも呼んでおきましょうか」

「それで？」

「夢を見ながらも、私の意識は保たれていた。だからよく考えて、よくよく考えて、ようやく気がついた。私は愛するロキと共鳴している」

「あ、愛？共鳴？」

そんな言葉、リアには小説以外では初めてだった。

「ロキに恋い焦がれるが故に、私はロキに会えなくなつてしまったの。異民族と結ばれることは、何百年も積もってきた歴史が作り出した〈大罪〉だからよ。〈大罪〉の子は、相手国の民になる。この国で愛する者と生きること許されぬという、一つの罰を受けることになつたのよ」

「ちよつ、親父達って」

「〈大罪〉よ」

リアは絶句した。

自分が今まで生きてきた世界が崩壊していく。姉が〈大罪〉の娘であるのなら、同じ血の流れる自分も〈大罪〉である。

そして、もしかすると自分も……

「眠いわ」

「え」

「ロキが目を覚ますわ。代わりに私は、今とても眠たいのよ」

「あ、待って。まだ聞きたいことが」

「明日に……して……」

「あたり、とラー ज्याは倒れた。」

その時、ロキの手がぴくりと動く。

うつすらと臉を開けたロキには、リアがラー ज्याを揺り動かしているのを、ほんやりと見ていることしか出来なかった。

## 第三章 〈昼〉と〈夜〉の狭間を

「それが、真実ならば……」

国王はうなだれた。朝になって王宮が目覚めると、リアが王宮にいる全ての者を〈謁見の間〉に集めて、今まさに事の次第を伝え終えたところである。

ラー ज्या、そしてリアが〈昼の民〉と〈夜の民〉の混血であること。

二つの民族が結ばれることは、二つの民族の暮らしがあまりにも違い過ぎるがために、〈大罪〉であること。

〈大罪〉は数百年前の両国は取りきめた規約であるが、いつの間にかやら 〈大罪〉は相手国の民になることを以って、裁かれるようになったこと。

ラー ज्याは〈大罪〉を裁かれ、〈昼の民〉になってしまったこと。

そんなラー ज्याを救うが如く、〈神憑き〉とラー ज्याが名付けた能力が備わったこと。

ラー ज्याに、ロキが共鳴していること。ラー ज्याとロキは眠りを以って、一日を分けているということ。

ラー ज्याがロキを愛していることを告げると、ロキは崩れ落ちてしまった。愛して、愛されているにも関わらず、ロキはラー ज्याに二度と会うことが出来ないのだ。

「リア殿」

青くなった顔で、国王は声を搾り出す。ひどく痛々しい光景だ。

「ラー ज्याについて、よくぞ謎を明かしてくれた。まずは礼を言おう。だがな、私達はラー ज्याに〈夜の民〉に戻ってもらいたい。ラー ज्याはこの国の王女なのだからな。すまないが、引き続きラー ज्याの下にいて、ラー ज्याについていてくれないか」

「仰せの通りに」

「それと、私もラー ज्याに会いたいのだが」

「いいでしょう。夜になったらお連れします」

「いや、それはいい。私から会いに行こう。夜になったら、ラー ज्याの部屋に行く」

その間、ロキはずっと黙っていた。自分だけはラー ज्याに会えないが故に、場違いな者であることを感じていたのだ。

侍女や召使までもがラー ज्याに会うことを楽しみにしているのを見るにつけて、ロキは王宮に召される前に戻りたくなかった。

ラー ज्याがいた時は、ただ幸せだった。ラー ज्याが国に召されてからも、今以上の絶望を味わうことはなかったことだろう。

夜になるとロキは眠りにつく。そして、ラー ज्याが目覚める。

ロキは見せまいとしていたが、彼が沈みこんでいるのはリアの目に明らかだった。だがロキが起きていると、ラー ज्याが目覚めることが出来ない。ロキは黙って布団に入り、リアは何も言わずに彼を見送った。

対して国王や医師団、侍女や召使の喜びようはまたとない程だった。民族としては変わってしまったても、未だラー ज्याは〈青の国〉の王女なのだ。

目覚めたラー ज्याは、まずは自分を待っていた者達に頭を下げた。

「お父様、皆様、心配をおかけして申し訳ありませんでした」

侍女の中にはハンカチを目に当てている者もいた。国王はそこまではしなかったが、誰よりも嬉しそうな表情を浮かべていた。

「いいのだ、それは。私達を待たせたことくらい、気にしなくていい」

「あの、申し上げにくいのですが……」

「何かな」

「ロキ達が来る前も、私は目を覚ましたことがあったのです。ただ、棺が閉じられて……」

医師長が息を呑んだ。夜は眠るものだと、治療も休むものだと、そう考えて一日の終わりにには必ず棺を閉じていたのだから。

棺を開けておくことにしたのは、ロキだった。

「申し訳ありませんラー ज्या様!!!」

「謝ることはありません、〈眠りの病〉は……いえ、私が〈昼の民〉になってしまったことは、皆様には未知のことだったのですから」

棺に敷き詰められた花の上にラー ज्याが、すぐ近くのソファーに国王とリアが座り、その周りに医師団、侍女、召使が立ったまま控えている。ロキだけは寢室だ。

「ラー ज्या、私達は便宜もあって〈眠りの病〉と呼んでいたが、本当はそうではなかったのだな」

「ええ。戦争が始まってから何度か、講和条約を結ぶために〈昼の民〉と会談したでしょう。その時、私の中にあった〈昼の民〉の血が騒いだのです。戦争が始まるまでは〈昼の民〉に会ったことがなかったで、そんなことが起こるなんて思ってもいませんでした」

「姉さん、俺達が親父に会わなかったのって……」

「そう。お母さんが会わせないようにしていたの。昼と夜が逆転してしまうかもしれないから」

ラー ज्याは窓の外を見やった。暗闇は深く重く、街の姿など見えるはずもない。ラー ज्याが生まれた家はどこだろう。

「こちらの国での昼間を眠って過ごすようになってから、〈青の国〉の歴史、〈金の国〉の歴史、数々の神話、人の心の内まで……様々な夢を見ている。

神様が私をそのようにしてしまったの。これが〈神憑き〉。

だから今の私はね、夢に現れれば何でも知ることが出来るの。お母さんの考えていたことも夢に出てきたから、わかってるわ」

「じゃあさ、これも知っているかもしれないから質問するよ。何で〈昼の民〉は戦争を始めたの？」

今や全知全能に近づきつつある姉に向かって、リアが質問した。国王が大きく息をつき、周りのざわめきがなくなつてから、ラー ज्याは答える。

「昔から私の両親のように、〈昼の民〉と〈夜の民〉

が結ばれてしまうことはあった。でも、その果てに生まれるのは見た目と体がちぐはぐで、どちらの国に暮らせばいいかわからない中途半端者。

それを補うかのように、不思議な能力を授けられた。それが「神憑き」ね。でもそんな人、神だなんて言ってみても化け物みたいなものよね。

……それに二つの国はいがみ合っていた。だから二つの国で結ばれるのは「大罪」と、数百年前の両国の王が取り決めたのよ。いつしか「大罪」は愛する者と共鳴し、同じ時間を過ごせなくなるといふ罰がつくようになるなんて、全く予想もせずね。

「ここまではいいかしら?」

一同は一斉に頷く。

「でも実際には私のように、混血は生まれてしまっている。それを知った「昼の民」は……いいえ、「金の国」の政治家達は、「混血」を根絶やしにするために戦争を始めたのよ」

「ラージャ! 「混血」を根絶やしにするとは……!」  
「混血」はどちらの国で暮らすにしても、大変なのよ。私とリアみたいに「夜の民」の見た目で、「夜の民」に育てられないと、普通の暮らしなんて出来ないはずなのよ。

でもね、それを庇うように神様が降りてくるの。私が今、様々なことを知っているのは神様のおかげなの。そんな人って、国に必要かしら?」

「必要だ。全てのことを知っている者がいてくれることは……いや、それはやはり、」

国王の言葉が途切れる。彼は首をかしげ、考え、しばらくしてから頷く。

「青の国」からすると、自国にラージャのような者がいることは国益である。しかし「金の国」にとつては脅威になり得るのだ。そんな事態を、事前に解決しようと考えてもおかしくはない。

「戦争を起せば、戦地に沢山の人が向かう。普段は相手国と接点のない人だって、相手国の誰かと接触することになるでしょう。それに、どちらの国も諜報員

を送り込んだわ。彼らが歩き回ることは、両国の接点を作る役割になったでしょうね」

「姉さんのように相手国に感化された者こそ「混血」。俺は運が良かったんだな」

リアは嘆息した。自分も姉のように、「昼の民」になっていたかもしれないのだ。

「ねえお父様、この棺のことだけど」

「昼の民」が、ラージャの生誕祭に贈ってくれたものだが」

「棺は死人のためのものではないでしょうか? どうして生きている私を入れたの?」

「……まさか」

国王が言葉をやめ、丸くした目を左右に動かす。リアが続きを引き継ぐことにした。

「混血」を根絶やしにしたかった「昼の民」、でも姉さんは眠っても王女だったからね。警護が厳しくて簡単に始末出来そうになかったから、とりあえず棺に閉じ込めることにしたんだ。もしかしたら姉さんを殺すのは躊躇われたのかも」

「あの棺が送られる前も、何度か目覚めてはいたのだけれどね。でも、こんなに喋ったり動いたり出来なかったわ。医師団が処方してくれた点滴に栄養価はあったけど、意識をはっきりさせには足りなかったもの。それに意識が混濁していた私は、体を上手く扱えなかったみたいだし。」

はつきりと覚醒するようになったのは、ロキが来てからだわ」

ラージャは寝室の方に目をやった。既に東の空は、うつつらと明るくなり始めている。

「どうも神が憑く代わりに、愛する人とは離れてしまいうらしくて……。私はロキと共鳴した、ロキを愛していたことが仇になって」

ラージャは俯いた。今にも泣き出しそうな顔をしている。八年前のロキを思い出しながら、十六歳のロキを思い浮べているのだ。

「ロキは素敵になったわね。ついつい寝顔に見惚れて

しまったわ。なのに、なのに、」

ゆつくりと、ラージャがその身を倒していった。棺の中の花畑に横たわって、今にも消えてしまいたいような声を出す。

「ロキに会えないなんて……。ロキと話が出来ないなんて……。寂しいわ、切ないわ」

「姉さん、眠るの?」

リアが棺の横に跪き、ラージャの顔を覗きこんだ。ラージャはそれを見て、はかなげに笑った。

「ロキと、こうやって話が出来ればいいのに……」

すう、と寝息が聞こえた。

ラージャが眠ってしまうと、その場はざわめき立つた。

寝室の扉に背をつけてその音を聞き、目覚めたロキが一人、拳を握り締めていた。

#### 第四章 出会いという幸せ

ラージャの声は絶大なものとなった。何百年もの歴史と、数多の人間の心を、手に取るように知ることが出来るようになった彼女は、過ちを恐れず一声で国政を動かすのだ。

召使のうち数人は、新たな役職に就いた。「声を聞く者」である。夜になるとラージャの傍らに控え、話を聞く仕事だ。国王などは毎晩でもラージャの声を聞きたがったが、昼間の政務に支障が出てしまうのでその役から下ろされた。

次第に戦争の傷跡は復興作業によって見えなくなり、残ったものは文化財に指定されて、新たな財産になった。そうやって平穏な毎日が過ぎていく。

「俺がここにいる意味はあるのだろうか」

ロキとリアはラー ज्याの部屋での生活を続けているが、最近二人が手に取る書物は物語が多くなった。ラー ज्याが何もかもを知る存在になってしまったのである。ラー ज्याの体は元に戻ることはない。《昼の民》の血に感化されたのだからと、ラー ज्याが言っている。

つまり俺達に課せられたラー ज्याを目覚めさせる、及び《眠り病》の原因を探して治す、という任務は実質なくなつたわけだ。だから俺がここにいる意味はない。

「待てよ、ロキ」

ソファアに読みかけの書物を置いて、リアが鋭い声を出す。

「ロキがここにいる意味がないって言うなら、俺はどうなるんだよ」

「リアはいいさ。神の弟として国王までも一目置いていて、ラー ज्याに及ばないにしろ頼りにされているんだから。それにラー ज्याが気軽に話せるのはお前みたいだし。だがな、」

リアには見覚えのある、物事を見据えた顔をロキはしていた。王宮に召されたとき、ラー ज्याの傍にいられる限りはいると言ったとき、そのときと同じ顔である。

「俺は何の役にも立たないんだぞ」

「そうは言っても姉さんの覚醒を促すためには」

「俺が必要ってか？ そんなことはないさ」

「は？」

「はつきり意識を保っているのだろうか？ 俺がいなくても大丈夫だろうか」

「いや、でも」

「だったらラー ज्या様に聞いてみるよ。ラー ज्या様の言葉に間違いはないのだから、さ」

リアはその日、ロキと共に眠らずに、ラー ज्याを待っていた。ロキが眠ってから寢室を抜け出し、ラー ज्या

と《声を聞く者》が政務について話し終えてから、その経緯を伝える。

「確かにロキが近くにいらなくても、私は目覚めることが出来るわ。最初のうちはロキが近くにいることで目覚めやすかつた気はするけれど、今はロキがいなくても大丈夫なくらい、慣れてしまった」

ラー ज्याは寢室の方に目を向けながら、静かに言った。本当に答えをわかっているらしい、迷いなど欠片も見受けられない。

「私達は共鳴している。どんなにロキが離れても、王宮から出ていっても、この繋がりは断ち切れないわ。だから私の覚醒が崩れることはない」

「じゃあ、ロキがここにいない意味は……」

「ないわね」  
リアは唾を呑んだ。これがロキの耳に入れば、ロキは帰ってしまうだろう。ラー ज्याの傍にいたいと言っていた、過去のロキを置き去りにして。

リアは拳を握り締めた。ラー ज्याはその様子を見ながら、溜息をつく。

「……私がここにいてほしいと言っても、駄目でしょうね」

「姉さん？」

「私はロキと離れたくないの。でもね、眠っているロキを見ていただけなのはつらいわ。感情が矛盾しているのよね」

「……ロキも同じことを考えただろうね」

「ええ」

逢い見ることの出来ない相手と一緒に暮らす、遠くで相手の姿を思い描きながら暮らす、どちらの方がつらいだろうか。

ラー ज्याが金色の目を伏せた。リアは思わず自分の頬に、髪に触れる。毎日のように鏡を見ては、リアは自分がまだ青い髪と瞳を持っていることを確認していた。しかし《昼の民》に会って共に過ごせば、ラー ज्याのように体のどこかが金色になってしまうかもしれない。そうだった時、リアは誰と共鳴するのだろうか。

「姉さん、《昼の民》に感化されたとき、必ず誰かと共鳴するものなの？」

「必ず、するわ。リアは誰と共鳴すると思う？」

「……わからない」

ラー ज्याがいなくなつてからは、リアはいつもロキと一緒にいた。リアにとつてロキは良き兄で、そんな面倒見の良いロキの方に、女の子は寄つていったはずだ。たまにリアの方に振り向いてくれる子がいたことはいたけれど、愛し合う関係に至つたことは一度もない。

「愛している女は一人もいない」

「じゃあ、リアにとつて大切な人と共鳴するわね。お父さんか、お母さんか」

「ロキとは共鳴しないよな？」

「しないわ。ロキは私と繋がっているもの」

リアはほつとした。ラー ज्याに続いて自分までロキに会えなくなつてしまつては、ロキが一人になつてしまふ。

それに、自分がロキに会えなくなつてしまふのは寂しい。

「……私って、ひどい女なのね」

「え？」

「私より先にリアがロキと共鳴してくれば、私かロキと共鳴することはなかったのに。そんなことを考えているのよ、今」

リアはラー ज्याを詰つたりはしなかった。きつと自分がラー ज्याの立場なら、同じように考えていたはずだからだ。

「姉さん、《夜の民》に戻る方法はあるの？」

「残念ながら、ないわ」

ラー ज्याは唇を噛み締めていた。

《夜の民》と関わるようになって、戻れないのよ。結局のところ、私が《夜の民》として生きるには、幼い頃から《金の国》で暮らし、途中から《夜の民》になるしかなかったのよ。

……でも、そうだったとしたら、ロキに会えなかつ

たかもしれないわね」

もしもロキ、ラージャ、リアの十数年に一つでもひずみがあったなら、三人は出会えただろうか。

出会わなかったとして、それが本当に幸せだったのだろうか。

「……ロキに会えて良かったと、俺は、思うよ」

本心だった。ラージャがいなくなつてからもずっと傍にいて、血の繋がった家族よりも近い存在だったロキだ。ラージャにとっても大切な彼は、リアにとってもそのような存在である。

「ロキに出会わなければ、誰か他の人と出会って、ロキではない誰かを愛していたでしょうね。」

……でも、ロキへの想いはたった一つ。私はその想いも、ロキと同じくらい愛しいわ。それを得ることが出来たのだから、ロキに会えて良かったのよね。きっと、そうなのよ」

最後に強く言いきつた、その言葉がラージャの本心だ。王宮に迎えられる、離れて暮らすことになつても、ロキとの思い出は自分を支えてくれた。

王女になるため、勉学に励む必要があつた。他国とのパーティーのためにピアノやダンスなどの習い事もあつた。

一日中、古参の侍女が付きつきりてラージャに王女としての礼儀作法を教え込み、少しでもはしたないところがあれば義理の母親に怒られた。

戦争が始まると、王女として《夜の民》に命令を出した。《金の国》を攻めろ。《金の国》に勝て。それは《夜の民》に死を命じているようで、心苦しかった。

それでも、幼馴染みの男の子が、どこかで自分を見ていてくれると思つていたから。だからラージャは「ラージャ様」になれた。大好きな彼に、恥ずかしい姿など見せたくなかつた。

「ロキに会えなくなつてしまったことが苦しいのなら、それだけロキに会えたことが幸せだったということだ。だから、いいんだ」

ラージャとリアはおのずと手を取り合い、やがて抱

き合つて泣き出した。声を聞く者は、黙つて部屋を後にした。

ある日の真夜中、ラージャは《声を聞く者》に申しつけた。

「近いうちに、お父様とお話させてください。大事なお話があります」

## 第五章 光の指標を《混血》に

《青の国》から東の方向に、《光の国》と呼ばれる場所がある。そこではこの大地に住まう様々な民族が集まり、戦争とは無縁に暮らしているという。

「ですから私は、そちらに移ろうと思ひます」

ラージャがそう言つた瞬間、国王は立ち上がった。慌てて召使達が飛びついて押さえ込むが、国王は大声を出す。

「ならぬ！それはならぬぞ！！」

「どうして？私はいもう《夜の民》ではないのよ。ここに

にいる意味はないの」

「お前は王女だ！この国を治めねばならぬ！」

「そんなことないわ。私が王女なんて馬鹿げているわ」

「何を言う！お前は七歳の頃から王女なのだ！この国を治めねばならぬ！！」

「そんなことないわ！」

ラージャは腰掛けていた棺の縁から、勢い良く立ち上がった。つかつかと足音高く、顔を真っ赤にした国王に歩み寄っていく。

「私は王女として扱われていない！神様のように崇められ、奉られ、時には恐れられているわ！」

「それで良いではないか！国を治める者は国の象徴であり、国の全てを動かす神でなければいかん！」

次は侍女達が動いた。左右からラージャに抱きつき、

彼女を止めたのだ。ラージャが右手を上げようとしたからである。

「……ねえ、お父様」

ラージャは侍女達を無礼者と罵ることはしない。立場上、国王に手を上げることをラージャには許されていないのだから、非礼を止めてくれたことに礼を言つても良いくらいなのだ。

「何だ、ラージャ。口答えをしたことを謝る気はあるのか。それともこの私を叩こうとしたことに何か言うのか」

「ただ尋ねるだけよ。あのね、お父様は、神こそは何でも出来ると思っているの？」

「無論だ。神は間違ひなく国を治め、その国を豊かにする。その結果、神も豊かになるのだ」

「あのね、私は国を治める以外の全てのことを出来るかと聞いているの。例えば私が、この王宮を抜け出して《光の国》に行くことが出来るかと」

国王は息を呑んだ。その様子を傍らで見ていたリアは進み出る。

「姉さんは自分の力で《光の国》に行くことが出来ます。国王様には止める力はありません」

「リア殿、お前は私の娘が国抜けする手助けをするのか」

「手助けしなくとも、姉さんは一人で《光の国》に行きますよ。神様なのですから、それくらいの知恵はあります」

国王の齒軋りの音が聞こえてきた。リアは冷静でいようと努める。ラージャが勝手に国抜けをする事態は避けてやりたい。いくら激昂しているとはいへ、国王はラージャにとって義理の父親だ。国王がラージャの目覚めを喜んだとき、ラージャだって笑みを浮かべていた。

「国王様にお聞きします。《金の国》が戦争を始めた原因は何でしたか？」

「《混血》の根絶やし、ラージャがそう言った。まあ、ラージャが嘘をついていたかもしれんが」

「嘘をついてなどいけませんよ。その話を間近で聞いていた私達は断言します」

リアは侍女と召使を手で示した。それでも国王は召使なぞラー ज्याの命令を聞いて当然、言いくるめられているに違いないなどとぶつくさ言っているが、リアは聞こえない振りをする。

「金の国」は何故、「混血」を根絶やしにしようとしたか。それは「神憑き」を作らないためです。どちらかの国に「神憑き」が集中すれば、二つの国から天秤が失われますからね」

そこで一度、リアは言葉をやめた。

「しかし、金の国の目的はそれだけではない」

ここから話し手をラー ज्याに戻す。

「金の国」の左大臣だった男の話をしましょう。彼は「金の国」の王に最も信頼されており、政務を司っていたといえます。

さて、彼は二十年程前に「青の国」を視察に来ました。「青の国」はとても美しく、特に女性が美しかったそうです。間もなく彼はとある娘に一目惚れをしました。娘の方も運命を感じたのでしょう。二人は惹かれ合い、やがて結婚しました」

この時ラー ज्याは類ないほどに不幸な顔をしていました。リアは目を閉じて、自らの目蓋に触れる。

「ですがそれは、二人の「大罪」の子をこの世に送り出すという結果になってしまったのです。

……今、その人は大臣を辞して、どこかに行ってしまった。妻に子供を押しつけたことも、子供に「大罪」を押しつけたことも、彼にとっては良心を苛むことになりましたから」

侍女達がラー ज्याを放した。ラー ज्याはゆつくりと国王の方に向き直る。

「私はあなたをお父様と呼んで参りましたが、私の本当のお父さんは、その大臣なのです。

……お父さんは「混血」の私の幸せを願い、私を「光の国」へ送り出したいと考えました。そこで戦争を引き起こし、「混血」を明るみに出したのです。「混血」

にとつて暮らしにくい世界を浮き彫りにし、彼らが「光の国」を目指すように」

ラー ज्याは窓から外を見やった。「青の国」は間に包まれているが、向こう側には昼間を過ごしている「金の国」がある。けれど全員が全員起きているわけではなく、今頃眠っている者もいるはずだ。

「お父様、今の私は幸福ではないのよ。「青の国」にいながら、「夜の民」と共に暮らせない。「金の国」に行っても見た目はほとんど「夜の民」、そんな私が「金の国」で暮らせるかしら。」

そしてどちらの国にいても私を神として崇める人に囲まれて……、息苦しいはずよ」

ラー ज्याは自分の部屋を見回す。沢山の召使、侍女、立派な調度品、手に入らない物のない生活、どれもラー ज्याを追い詰めるのに十分だった。

「召使や侍女にかしずかれて不足のない生活を送ることは、私には似合わない。本当は平民として、自由に生きたいの。私によくしてくれたお父様とお母様には感謝しているし、悪いことをしているとわかっているけれど、私はこれ以上、不幸を背負うのには耐えきれないわ」

「……ラー ज्या」

再び召使達が、義理の娘の名を呼んだ、「青の国」の王を掴んだ。今度は怒りの国王を止めるためではない。足の力が抜けてしまった彼を支えるためだ。

「まさか、今までの暮らしに不満があったのか？」

「不満ばかりだったわ。いつでも侍女を付けられて、自分の好きなように出来ない。何でも召使にさせなければならぬ。」

……そして、ロキに会うことが出来なかった。平民との面会は許されていなかったもの」

リアはラー ज्याの傍に行く。姉はリアより少しだけ背丈が小さい。自分の鼻の辺りにラー ज्याの頭がある。

「姉さん、行こうか」

「ええ」

二人は寝室の扉を開けた。ロキは規則的な寝息を立てて眠っている。

ラー ज्याは慣れた仕草でベッドの横に跪き、ロキの寝顔を眺める。

「ロキ、寝顔だけでも見ることが出来て、私は幸せよ。会ってお喋りが出来ないのはやっぱり寂しいけれど、王宮に来てくれるまでは姿すら見られなかったものね」

ラー ज्याは微笑んだ。大粒の涙は拭いて、ロキへの未練も乾かして、いよいよラー ज्याの旅立ちが始まる。「ロキ、来てくれてありがとう」

声には出さず、唇を動かした。さようなら、と。ラー ज्याは目を閉じて、ロキに口づけた。

次の日から、ラー ज्याの宣下が「青の国」を舞うことになる。

混血よ、「光の国」へ。

リアがひねり出したその文句が合い言葉となり、王宮には「混血」が集い始めた。ラー ज्याは一人一人の手を握り、挨拶を交わし、共に「光の国」で生きることを約束する。

中には自らが共鳴した、愛する人を連れて行きたいと言う者もいた。ラー ज्याは少し考えて、後から来てもらうことにして、了承した。

国王はラー ज्याとの関係を清算し、次の王女を探し始めている。憲法は近いうちに改正され、養女を誕生日で選ぶというものはなくなる。養女の身の上や、考えを尊重するとつもりだと、国王は言った。

「青の国」は動き始める。

そしてラー ज्याとロキとリア、三人の別れが近づいてきた。

## 第六章 名前を知らない男

「青の国」の朝早く、〈金の国〉の夜の始まりに、ラー  
 ジャを代表とする〈混血〉の者のための、〈出立の儀〉  
 が取り行われる。場所は〈青の国〉の王宮であるが、  
 参加者の半分は〈昼の民〉だ。ラージャは〈金の国〉  
 にも文を送り、共に出立する誘いをかけていたのだ。

〈金の国〉の王からは、輝かしいばかりの贈り物が  
 あった。かつての左大臣の遺志を汲んだのである。加  
 えて礼節を重んじた書簡が同封されており、〈青の国〉  
 の王はすぐさま格式高く返事を整えた。ここから両国  
 の歩み寄りが始まる。

ラージャは儀式のために、純白のドレスを新調した。  
 裾のレースは戦争で半焼した、とある孤児院の子ども  
 達で作ってくれた。それをラージャの元に届けに来た  
 美しく聡明な八歳の少女こそ、次期王女である。

「ラージャ様、そろそろお時間ですよ」

ラージャの部屋に、侍女と召使が迎えに来た。荷物  
 は既に召使が馬車に積み込んであるので、ひどく殺風  
 景な部屋だ。あの子が住まうとき、どんな妾になるの  
 だろうか。侍女達は寂しさの裏に、そんな期待を抱い  
 ている。

「ありがとう。あなた達はよく私に尽くしてくれたわ  
 ね」

ラージャは晴れ晴れしく侍女達の姿を見た。こんな  
 目で彼女達を見ることが出来るのは、初めて最後だ。  
 ひどく名残惜しい気もするが、ラージャは笑顔である。  
 「身に余る光栄なことでございます」

「頭を下げないでいいのよ。最後まで、上からもの  
 申すのはよしたいの。あのね、私はあなた達に言わな  
 ければならないことがあるわ」

ラージャはソファから立ち上がり、侍女と召使達  
 の顔を見回した。今まで我儘も不満も愚痴も彼女達に  
 抱いてはいたが、とても大事な人々だった。

ラージャは穏やかな気持ちで、彼らに最後の言葉を  
 かける。それは命令に遠く及ばない。

「私は平民だったから、あなた達にかしずかれるのは  
 最初のうちは不慣れで、うるさくもありました。でも、  
 あなた達がいなければ私はとても寂しかったと思いま  
 す。何か相談するにしても、戯れに話をするにしても、  
 あなた達が傍にいてくれて助かりました。私の話など、  
 政務に関係なければ誰も聞いてくれなかったのですか  
 ら。」

……お父様もお母様も素敵な人でしたが、あなた達  
 も素晴らしい人達でした。お世話になりました。あり  
 がとうございます」

ラージャは深々と頭を下げながら思う。  
 次の王女も、人にお礼を言える子だ。だから 〈青の  
 国〉は、私がいなくても大丈夫。

「ロキ殿、リア殿」

ラージャの荷造りが始まってから、邪魔になつては  
 ならぬとロキとリアは部屋を移動していた。その先は  
 召使の宿舎である。二人が落ち着いて〈出立の儀〉ま  
 で過ぐすには、最適な場所だった。

「ラージャ様の挨拶まで、あと少ししか時間がありま  
 せんよ」  
 大臣が扉を叩いていると、それは内側から開かれた。

そしてロキでもリアでもない人物が、そこに立ってい  
 た。

「これは、医師長ではないですか」

「ロキ殿とリア殿は準備中だ。二人を置いて行くが良  
 い」

「国王は二人と共にラージャ様を送り出したいとおっ  
 しゃつたのですが」

「ロキ殿とリア殿のことは心配するな。あの二人が選  
 んだことだから、と伝えたまえ。国王も納得されるだ  
 ろう」

「……わかりました」

医師長がここにいるのはおかしいことだと思いつ  
 つ、大臣は扉から離れた。国王には事実をそのまま述  
 べるしかない。

医師長は扉を閉めて、鍵もかけてから部屋の中央に  
 戻った。国王に詳しい話をするわけにはいかなかった  
 し、これから行なわれることは、今はまだ、知られな  
 い方がいい。  
 何故ならそこには青い髪の者も、金色の髪の者もい  
 た。

ラージャが王宮のバルコニーに進み出ると、歓声が  
 上がった。それが〈夜の民〉だけのものではなく、〈昼  
 の民〉からも向けられているのだと思うと、ラージャ  
 の心の中は温かくなった。

一同の最前列にはラージャと共に旅立つ者達が、誇  
 らしげにラージャの言葉を待っている。

ラージャはバルコニーの中央で、民衆を見渡した。  
 いや、むしろ見下した。

「この、愚か者め」

ラージャは冷たい目を広場に落として、ただ一言、  
 吐き捨てた。

騒然とする広場を一瞥し、ラージャは一同が静かに  
 なるのを待たずに次の言葉が続ける。

「〈昼の民〉も〈夜の民〉も、こうやって一同に集ま  
 ることが出来るというのに」  
 ここに来て、しん、とした。

無意識のうちに〈昼の民〉は〈夜の民〉を、〈夜の民〉  
 は〈昼の民〉を見つめていた。そう、彼らは気が付い  
 ていなかったのである。少しの譲歩があれば、〈昼の民〉  
 と〈夜の民〉は同じ時間を過ぐすことが出来るという  
 ことに。今ここで、それが起こっているということに。

「あなた達は賢沢だわ。一緒に過ぐすことが出来るは  
 ずの人に対して、いがみ合って、殺し合いまでやった  
 のだもの。」

私なんて見た目は〈夜の民〉なのに、〈青の国〉で

は暮らせない。それに見た目が〈夜の民〉の私を、〈金の国〉は受け入れられるのかしら」

ラー ज्याはバルコニーの欄干を握り締めながら、青と金で美しく染められた広場に向かって、怒鳴る。

「……それだけではないわ。私は世界で一番愛している人と、二度と会うことが出来ないのよ！」

ラー ज्याと共に旅立つ者達が、いつの間にか両手を握り締めていた。自分達の不遇を訴えかけるラー ज्याに、自分達の想いを重ね合わせて、ラー ज्याに祈るような目を向けた。

「どうして混ざり合えなかったの!? 混ざり合えたなら、〈大罪〉が作られることはなかった! 私は〈大罪〉の子にならなくて済んだわ!

報いを受けなくて済んだかもしれないのよ! 〈大罪〉なんてなければ……!」

そうだったなら、私は誰よりも大事な……ロキと、愛するロキと共に生きる道を選ぶことが出来たかもしれないのよ!」

広場の隅々に、ラー ज्याの言葉が響き渡った。

水滴が地面を叩く。祈りの言葉、呻き声があちこちから漏れる。声にならず、ただごめんなさいと唇を動かす者もいる。

〈昼の民〉も〈夜の民〉も、ここではラー ज्याに服するしかなかった。

けれどこれこそ、両国が同じように動き始めた証だった。

ラー ज्याはここで、声のトーンを落とす。目を伏せて、痛々しくも言い放つ。

「私は、〈青の国〉も〈金の国〉も大嫌いよ」

〈青の国〉の王はうなだれた。我が王族は、いつから間違った道を踏み出したのだろうか。娘を傷つけずに済む道を選ぶことが出来なかったのだろうか。見ると〈金の国〉の王も呆然としていた。彼も同じことに気がついたのである。彼の周りにいた大臣達も、所在なさげだった。

「それでも、」

ラー ज्याの言葉は続いている。

「〈青の国〉も、〈金の国〉も、私の故郷です」

広場にいた誰もが、胸を押さえた。

次にラー ज्याを見上げて彼らが叫んだのは、歓喜と祈りの歌だった。

不思議なことに〈青の国〉と〈金の国〉の賛歌は、どこことなく似ていた。

共に奏でられたところで、不協和音になりはしない。

歓声に頭を下げ、ラー ज्याは王宮に戻るために振り返る。

が、その足を止めた。

王宮の横にあった建物の、その屋上を見る。

リアかと思えた。

金髪の男が、金色の瞳でラー ज्याを見ていた。

「お父さん」

その時、ラー ज्याは不思議な光景を見た。

〈青の国〉から〈光の国〉に向けて伸びる、一本の道。

そこに行くのは、松明を掲げて颯爽と馬に乗る、リアによく似た〈昼の民〉。

「お父さんは戦争を起こした後、いなくなったと見せかけて、道をつけてくれたのね」

戦争を起こしたことは断罪されるべきだからと、彼はそこにいる。

だが、ラー ज्याは深く感謝した。

「ありがとう」

彼が最後に見たものは、愛する娘の笑顔だった。

## エピローグ

ラー ज्याを先頭とする神々の列は、〈青の国〉から〈光の国〉まで真つすぐに進んでいた。どこまでも荒野が続く大地を進むには方位磁石を使わなければいけないところだが、彼らには道があった。かつての〈金の国〉の左大臣が馬で荒地を踏み固め、邪魔になる木々を切り倒し、沼地や岩壁などには迂回路を用意していたのだ。

その後、ラー ज्याは父親がどうなったのかは知らない。夢に見ることがあれば知ること出来るはずだが、きつとラー ज्याは知ることなく生を終えるだろう。

彼の夢を見たのは、王女を全うした最後の瞬間だけだった。

「ラー ज्या、この辺りで休憩しましょう」

「ええ。あそこに小川があるから、馬も休ませてあげましょう」

一行はゆつくりと進んでいる。半分は民族が違う故に、眠るべき時間は馬車で眠り、起きている者がそれを引っ張って進む旅路なのだ。しかし急ぐ旅路ではないし、のどかな時間が愛しくもある。何も気にすることなどなかった。

ラー ज्याは王女を辞した後なので、様を付けられるのをやめてもらった。〈光の国〉に着いてからは移住者として、皆と同じように平民として生活を始めるのだ。敬称なんて、後から自分に似つかわしいものをつけてもらえばいい。

思えばラー ज्याに王女など似合わなかった。王女らしく振る舞うことは出来ても、違和感は拭いきれなかった。どこかでラー ज्याと呼んでほしい、王女では

なくラージャとして見て欲しいと、声にならない叫びを上げていた。

けれど、あの子なら大丈夫だろう。国王はラージャがいた時よりも丸くなったことだし、国民達も少しずつ、変わっていきける。

「ラージャ」

藍色の髪の毛の子が近づいてきた。彼は母親と共鳴してしまっただけで、一人でこの旅に参加した。ラージャを始めとする女性達が代わる代わる彼の面倒を見て、随分彼も心を開いてくれるようになった。

「あれは、ほし、じゃない」

「あれ？」

地平線近くに、明かりが見えた。それは少しずつ、こちらに近づいてくる。

「だいじょうぶ」

男の子がラージャの手を握った。金色の目が、きらきらと輝いている。

「ラーじゃ、に、あいにきた」

「え？」

男の子が自在に夢を見る才覚の強い者であったことよりも、言葉の方にラージャは引き付けられた。ラージャは男の子の隣で、その光を見つめる。

やがて光の正体が明らかになってきた。馬に乗った男だ。灯笼を片手にぶら下げて、器用に馬を操っている。

「皆は下がっていて」

ラージャは進み出た。

「あなたはロキなの？それともリアなの？」

「どちらでもあると言えるし、どちらでもないとも言える」

「……どっちでも、いいわよね」

ラージャの〈出立の儀〉の日取りが決まると、〈青の国〉の医師団は、〈金の国〉に精鋭の医師を要請した。

リアは彼らに直面して間もなく、眠りについた。姉と同じように、〈昼の民〉に感化されたのである。

それを確認してから、ロキは麻酔をかけてもらってリアと共に眠った。

その間に、両国の歴史に前例のない術式が行われた。そして〈青の国〉と〈金の国〉が何百年もかけて積み上げてきた〈大罪〉は、終止符を打つことになった。

「あなたの名前は？」

「まだ、ないんだ」

「これから付けるのね」

「一緒に考えてくれるだろうか」

ラージャは頷き、愛しい男達の胸に飛び込んだ。

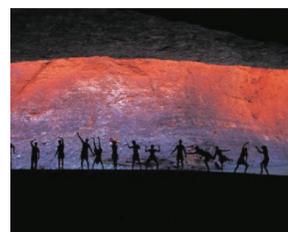
(さえき はるか・札幌校四年)



## 小論文部門 佳作

## パフォーマンスとしてとらえる「話すこと・聞くこと」とその指導

武田拓也



役者として初めて舞台上に立った日から6年がたった。その間、新しい劇団の旗揚げに携わったり、富良野グループの先生方による演劇の講義を受講したりして、新鮮な刺激を受けながら役者としてこれまで30をこえる舞台に立つてきた。私が役者としていつも心に刻んでいる言葉がある。「もしも演技の才能があるなら、聞く才能もあるっていうことだと思っよ。」アメリカの俳優モーガン・フリーマンが『ロサンジェルス・ビュウ』誌のインタビューの中で言った言葉である。この言葉との出会いをきっかけに、役者にとつての演技とはどういうものなのか、演技における「話すこと・聞くこと」とはどういうものなのか、演劇史を手がかりにひも解いていくことになったのだが、その手がかりは旭川キャンパスの図書館にあった。ジョン・ベネディティの著書『演技創造の実際 スタニスラフスキーと俳優』という本である。この本を読み終えた私は、後の演劇界に大きな影響を与えたロシアの演出家スタニスラフスキーが、今から50年以上も前に感じていた役者の演技に対する疑問は、現在の国語科教育における「話すこと・聞くこと」の指導が抱えている問題と通じるものがあると直感的に感じたのである。

私が大学に入るまでに受けてきた国語科の「話すこと・聞くこと」の授業は、「私たちはことばを覚える前の赤ちゃんではないのだから、ことばを用いて話すことも聞くこともできる。どうしてわざわざ話すことや聞くことを勉強しなければならないのか」という疑問に満ちたものだった。どのように話し、どのように聞くことができればよいのか、目指すべきよい話し手やよい聞き手の姿が曖昧であればあるほど、1時間1時間の「話すこと・聞くこと」の授業において身に付けないければならない力もますます曖昧なものとなってしまう。そうして結局は、何を学んだのかよく分からない授業になってしまいがちなのであった。もともと日常生活の「話すこと・聞くこと」の場面や状況は、決められた形を持たずに絶えず変化していくものであるから、こうした偶然性や不確定性というキーワードをどのように指導の過程に組み入れて、どのような目標を設定すれば良いのかということがここでは問題となるのである。

偶然性や不確定性というキーワードで演劇史をひも解いていくならば、やはりロシアの演出家スタニスラフスキーがその出発点であるように思われる。ギリシャ悲劇が成立したのは紀元前5世紀頃だといわれて

いるため、演劇の歴史はかれこれ2500年近くにはぼるといことになる。しかし、近代以前の演劇における役者の演技は、どのように自分のセリフを言い、どのように身振りを交えるか、という外面的行動のみに重点が置かれていた。場面を間違えて登場した役者が、本当は違う場面で言うはずのセリフを堂々と言い、場面を間違えたことに気づかぬまま退場していったこともあったという。現代の演劇からは考えられないようなことだが、役者がただ単にセリフを言い合っているというこの状況は、どのように「話す」のかということだけに重点が置かれていて、「聞く」ということはまったく無視されているといってもいいだろう。そのため、スタニスラフスキーは、外面的行動のみに重点を置いた近代以前の演劇から脱却して、外面的行動を正当化するための内的状態を準備することを志向したのである。例えば、役者がセリフを言うという行為ひとつにしても、「私がセリフを言う順番だからしゃべるよ」というようにただセリフをしゃべるというのではなく、セリフをしゃべることができる心の状態をつくるということである。それでは、こうした心の状態、すなわち内的状態をつくるために必要なことは何だろうか。それがまさしく「聞く」ということなの

であろう。近代以前の演劇は「話す」ことだけに焦点が置かれていたが、「聞く」ことによって「話す」ことを正当化しようとしたのである。セリフをしゃべるという外面的行動をするために必要なのは、他の役者のセリフを聞くことで生じた、今どうしても他の役者に聞いてほしいセリフをしゃべらなくてはならないのだ、という内面的状態である。

もちろん「聞く」ということは、私たちがいつも自然にしていることではある。しかし、演劇というパフォーマンスにおける「聞く」という行為は、それを強く意識して行わなければならないということに違いがある。役者に求められるのは、あらかじめ台本によって決められたセリフを決められた順番で言うという特殊な外面的行動を、内面的状態によって正当化することである。内面的状態によって正当化された外面的行動は、もはや特殊な外面的行動ではない。役者が自身自身の「話す」という演技そのものを意識するのではなく、他の役者に大きな集中を向けて意識して「聞く」ことで、自然に自分のセリフが出てくる状態がつくりだされるのである。そうすれば役者の表情でさえも他の役者に呼応しながら変化していくのだし、あらかじめどのようにセリフを話すかということも役者は準備することができないのである。つまり、「話すこと」は、「聞くこと」によって生まれる。それは同時に、演劇というパフォーマンスに、日常生活における「話すこと・聞くこと」の場面や状況と同じ偶然性や不確定性という要素が加わったということを意味している。

スタニスラフスキー以後、パフォーマンスとしての演劇においては、役者と他の役者の関係のみならず、役者と観客の関係さえも偶然性や不確定性に満ちたものに変容していった。そうして、現代の演劇における

役者と観客の関係は、もはや単なる生産と受容、あるいは主体と客体という関係ではなくなったのである。

日常生活における「話すこと・聞くこと」の場面や状況が、話し手と聞き手という二項によって区別されたものではないように、役者と観客という関係もまた同じである。例えば、役者が演技すると同時に、観客はそれを知覚し反応する。観客の反応は内的なものだけにどまらず、他の観客や役者にも知覚可能なものとして現れ、影響を与えるのである。役者の演技は、観客の反応によって集中力が変化し、観客の反応は、他の観客が知覚した場合には、その観客の舞台への関心や興味、集中力の程度は変化する。すなわち、役者のすべての演技は観客に影響を及ぼし、観客のすべての反応は役者や他の観客に影響を及ぼすのである。演劇における用語では、話し手や聞き手というような二項によって把握することができないような関係を、「観客参加」あるいは「役割交換」によって生まれた「共同主体」の形成と呼ぶことがある。もちろん、役者と観客が互いにどのような影響を及ぼしあうのか、つまり、どのように観客が参加するのか、どのように役者と観客の関係が絶えず交換されていくのか、どのような共同主体が形成されるのかといったことは予測不能なものである。演劇を上演するというパフォーマンスは、観客もパフォーマンスの共同主体となつてその進行に影響を与え、絶えず変化し続けていくために、偶然性や不確定性に満ちたものとなったのである。

国語科教育における「話すこと・聞くこと」の指導では、どのような「共同主体」を形成することができるといえるかが求められるだろう。日常生活における「話すこと・聞くこと」が決められた形を持たずに絶えず変化していくのは、「聞くこと」によってお互

いが影響を及ぼし合っているからなのであり、国語科教育における「話すこと・聞くこと」の指導の意義は、こうした状況を意識的につくりだし、「共同主体」の形成を訓練することにあるように思われる。そのため、共同主体を形成させるためには、どう話せばよいのかということを考えさせるより、高い集中力を持つて注意深く「聞くこと」を意識させるべきなのである。意識的に「聞くこと」によって生まれた「話すこと」は、すべて内面的状態によって正当化された「話すこと」であるとともに、意識的に「聞くこと」でお互いに影響を受け合い、それによって「話す」ことでまたお互いに影響を受け合っていく。こうした無限の循環の中で、より良い「共同主体」を形成させるためには、「聞くこと」にどれだけ意識を向けることができるかということが鍵を握っていると見えるだろう。

国語科教育における「話すこと・聞くこと」の指導を考えるにあたって、今から半世紀も昔の演劇人スタニスラフスキーに思いを馳せることができた一冊の本との出会いに感謝するとともに、役者としていつも心に刻んでいる「もしも演技の才能があるなら、聞く才能もあるっていうことだと思ふよ。」というモーガン・フリーマンの言葉を最後にもう一度思い起こしたのである。

(たけだ たくや・旭川校三年)

小論文部門 佳作

# 『源氏物語』研究〈女三宮論〉

中村 望



## 〈序論〉

### 一・【問題意識】

『源氏物語』は本文全五十四帖の長編王朝物語であり、主人公光源氏の誕生、恋愛、栄華、晩年に至る一生(正編「桐壺」―「雲隠」と、その没後の子供たちの時代、薫・匂宮を中心とした「宇治十帖」(統編、「匂宮」「紅梅」「竹河」と、「橋姫」以下の宇治十帖)に分けられる。さらにこれらは、第一部(桐壺―藤裏葉)・第二部(若菜―幻「雲隠」)・第三部(匂宮―竹河)橋姫―夢浮橋と三部に分けられる。この物語の第二部は、光源氏の衰退が示唆された老年と死の物語と言える。そして、第二部で大きな役割を果たすのが、紫の上と同じ紫のゆかりでありながら、登場した時から様々な人物によって幼さの強調され続ける女三宮であり、この降嫁が珍しい形態であったことは今井源衛氏が『源氏物語の研究』において当時の皇女の結婚状況を表にまとめて論じられている。そして、六条院への降嫁を発端として、柏木との密通事件や出家を通じ変貌し、源氏に影響していく姿が見られる。本論文ではこの女三宮が、『源氏物語』でこれほどまでに「幼さ」や高貴性を付与された人物として描かれたことや、「紫のゆかり」として物語に登場した意義、女三宮の成長とその意義について考察していきたい。

### 二・【テキスト】

本研究を行った池田亀鑑によると、『源氏物語』の現存写本の本文は、藤原定家による(一)青表紙本系統、源光行・親行の校訂による(二)河内本系統、それらに当たらない書写本の(三)別本の三種に大別できるとし、通

説化している。以下は各写本の説明を秋山慶氏の『別冊国文学 新・源氏物語必携』(※⑤)より引用したものである。

- (一)青表紙本系統：藤原定家によって整えられた証本をいう(中略)。青表紙本は河内本に比べてみだりに校訂は加えられていない、書本を忠実に書写した伝本である(後略)。飛鳥井雅康自筆本が現存。
- (二)河内本系統：河内守源親行が父光行の本文校訂を引き継ぎ完成させた校訂本である。(中略)河内本は、親行が古伝本系別本諸本の本文の最も良いものを選んで綴りあわせたものであり、新たにつくり出された意味の通りやすい混成本文である、とみなされる所以である。
- (三)別本：一つの系統を意味するものではなく、青表紙本・河内本以外のものを括る便宜的名称であり、(一)河内本成立以前の古伝本、(二)河内本成立以後の混成本文を有する伝本、(三)注釈的意図によって取り扱われた本文、(四)絵詞。古注釈・古系図等に摘要引抄されて残存する本文、以上四種類に分けられている。(中略)青表紙本系統諸本と河内本系統諸本が、それを書写する際には、書本のままに書写することが原則とされているようで、それぞれの系統内における異文がごく小さな範囲のものであるのに比べて、別本諸本は対照的である。

河内本は文意を通じやすくするということを重視し、本文を適当に取捨選択したものであるため、一つ

の系統線上にある青表紙本と比較すると純粹性を保っているとは言いがたい。青表紙本は、藤原定家の所持本であり、現存する善本は飛鳥井雅康自筆本である。青表紙本は、たとえ誤脱が多くとも河内本のような混成、または、校訂本文に比べて一つの系統線上にあるものと考えられており、その点では概ね純粹な本文と見て良いとされている。

今回は、一つの系統線上にあり、比較的手が加えられていない純粹な本文として考えられる青表紙本系統の現存する諸本の中で、最もまとまっているとされている飛鳥井雅康直筆本を定本とする、『新編日本古典文学全集 源氏物語』(小学館)をテキストとする。

## 〈本論〉

### 第一章 女三宮の幼さ

#### 第一節 教育者の対比構造

女三宮の「幼さ」は物語に登場した時から朱雀院を中心として「三の宮なん、いはけなき齡にて」(若菜上二十頁)「片生ひならん」(若菜上二十七頁)など、繰り返し指摘され、強調され続けている。この節では、なぜここまで女三宮は幼い人物として描かれなければいけなかったのかについて教育者を中心に考察していきたい。女三宮の「幼さ」は蹴鞠の際の垣間見を可能にし、密通を起こすために必要な設定であったと思われるが、この強調され続ける女三宮の「幼さ」について池田節子氏は『人物で読む源氏物語 女三宮』(※⑥)において以下のように述べられている。

彼女が朱雀院の娘であることが重要だと思われる。「光源氏の優越性を確認し、相關的に朱雀院の弱体性を確認してゆく、物語の論理」を考へ合わせれば、朱雀院の娘が聡明な女であってはならないのである。

このことは、初めて昼間に女三宮のもとを訪れた際の光源氏の言葉からうかがえる。

院の帝は、男々しくすくよかなる方の御才などこそ、心もとなくおはしますと、世人思ひたれ、をかき筋、なまめきゆゑゆゑしき方は、人にまさりたまへるを、などてかくおいらかに生ほしたてたまひけむ。(中略)さし並び目離れず見たてまつりたまへる年ごろよりも、対の上の御ありさまぞなほありがたく、我ながらも生ほしたてけりと思す。(若菜上七三、四頁)

光源氏自身も女三宮と紫の上との差をそれぞれの「生ほしたて」だと考え、朱雀院の教育のまずさを自分と比較して見ているのである。物語内において女三宮が精神的にも、情緒的にも、身体的にも幼い人物として描かれることで朱雀院の光源氏に対する劣性が強調されていく。また、「幼さ」が強調され、教育不足であることが後々に様々な人物によって語られることを踏まえると、朱雀院による女三宮教育の失敗(「劣性」と、光源氏による紫の上教育の成功(「優性」といった対比的な構図が示され、この構図は女三宮が光源氏との結婚を成し遂げる要因としても必要な設定であったと考えられる。

また、女三宮付きの女房が思慮や配慮、品に欠けることは「衣の音なひ、耳かしがましき心地す」(若菜上一四〇頁)「御簾のそはいとあらはに引き上げられたるを、とみにひきなほす人もなし」(若菜上一四〇頁)「鞠に身をなぐる若公達の、花の散るを惜しみもあへぬけしきどもを見るとて、人々、あらはをふともえ見つけぬなるべし」(若菜上一四〇頁)など蹴鞠の場面に多く描写がなされており、女房の質的問題も、「光源氏と紫の上とその女房」と「朱雀院と女三宮とその女房」といった対比的構図が想起され、女三宮付きの女房が思慮や配慮に欠けることが密通を起す要因の一つになってくるだろう。

## 第二節 「親さまの夫」としての結婚

前の説でも述べたが、女三宮と光源氏の結婚は光源氏による女三宮教育という観点で非常に大きい。そして紫の上と女三宮の共通点は「紫のゆかり」であるということと光源氏に「養育される」人物であるということが挙げられる。朱雀院が光源氏に女三宮を託すきっかけとなったのも、幼かった紫の上を立派に養育し妻にしたという経歴があったからであり、女三宮の「幼さ」を許容しつつあらゆることを教え、大人の女性として成長させることに期待をかけたことが影響しているだろう。女三宮は「えさらぬこと、はぐくみ聞ゆる御守り目」(「後見」という朱雀院の期待とともに結婚を成し得た。テキストにおいても朱雀院に対し、東宮が「かの六条院にこそ、親さまに譲りきこえさせたまはめ」(若菜上三十九頁)と「親さまの夫」という点から光源氏との結婚に賛成している。「親さまの夫」について三村友希氏は「姫君たちの源氏物語 二人の紫の上」(※⑦)で以下のように述べている。

光源氏は紫の上養育の過去をもう一度再現することを要求され、女三の宮は「もう一人の『紫の上』」への成長を期待されているのである。

光源氏は女三宮への琴の琴教授で、「親さまの夫」としての期待に応えようとする。氏は同書において、琴の琴伝授という時間自身が紫の上の苦悩に直接関わっていくことを以下のような点から指摘されている。

光源氏の「娘」であり、「妻」であるというのは、紫の上だけの特権であったのに、女三の宮がその過去を繰り返そうとしていたのである。(中略)光源氏のたった一人の「娘さまの妻」であった誇りと優位性の揺らぎが、この突然の発病に大きく関わっているのではないだろうか。

「過去」が繰り返されているという視点で琴の琴伝授の場面を考えると、女三宮が一度だけ「うち笑み」を見せる琴の琴伝授の時間は光源氏との関係性を深め、晩年に至って無常を感じる紫の上が発病に向かう

時間として必要だったと考えられる。この女三宮の感情の表出については、第三章第二節で詳しく考察していく。

また、「もう一人の『紫の上』」に成長することを期待された女三宮は結婚から数日の後に幼いばかりで、光源氏を失望させる。部屋の装飾や調度、衣装等が仰々しく格式ばっているのに比べて、当の姫宮が細くて小さく不釣り合いであると、光源氏に指摘されるほどであり、その後も「幼さ」が強調されている。

姫宮は、げにまだいと小さく片なりにおはする中にも、いといはけなき気色して、ひたみちに若びたまへり。かの紫のゆかり尋ねとりたまへりしをり思し出づるに、かれはされて言ふかひありしを、これは、いといはけなくのみ見たまへば(若菜上六十三頁)

女宮は、いとらうたげに幼きさまにて、御しつらひなどのことごとしく、よだけく、うるはしきに、みづから何心もなくものはかなき御ほどにて、いと御衣がちに、身もなくあえかなき。ことに恥ぢなどもしたまはず、ただ児の面嫌ひせぬ心地して、心やすくうつくしきさましたまへり。(若菜上七十三頁)

ここで調度品や着物ばかりが豪華であり女三宮が「あえかなり」とされているのは女三宮の内実が食い違ふことを象徴しているだろう。同じ「紫のゆかり」であり「もう一人の『紫の上』」への成長を期待された女三宮が、精神的・情緒的・身体的すべてにおいて未熟であることは、光源氏が紫の上の「幼さ」を美質(「正」と評していたのに対して女三宮の「幼さ」を欠点(「負」と評している点からも、両者は重ね合わせられつつも相対化され、同じ「紫のゆかり」である紫の上の正統性を証明し、紫の上への愛情を再確認させている。また、紫の上と長年をかけ築き上げた信頼関係に大きなむびを入れた女三宮との「親さま」の結婚自体が、「娘さまの妻」という後見も実子もいない紫の上の優越性を脅かす結果となり、さらには、女三宮の持つ負の幼稚性により六条院を崩壊に導き、光源氏の栄華が終焉に向かうことを示唆していると考えられる。

第二章 六条院世界の崩壊

第一節 女三宮の高貴性

池田節子氏は、『人物で読む源氏物語 女三宮』(※⑥)において女三宮は「身分と内実の食い違ふ女である」とことや、『源氏物語』には、これまで描かれることのない新たな女性像である」ことを指摘されている。これは、朱雀朝に中宮が不在である為后腹の皇女が存在せず未婚の皇女で女三宮よりも高貴な者がいないという最高の身分であること、負の(幼さ)を持った女三宮の身体的・情緒的・精神的な幼稚さの食い違いを指している。

女三宮が最上の高貴性を持った女性として描かれていることに関して、石津はるみ氏は降嫁の視点から「若菜への出発―源氏物語の転換期―」(※⑧)において以下のように述べられている。

降嫁は天皇家の、しかも上皇・帝の覚え高い皇女を迎え入れることのできる六条院の栄華を端的に世に示すものであると同時に、濃く準とは言っても他家とは別格の、王家の血が濃く準太上天皇として栄華の極みにある源氏に皇女を与えることのできる朱雀院側の繁栄をも充分に裏づけ得ることである。

女三宮と光源氏の結婚は天皇家と有力臣下の結合を意味しており、光源氏に唯一足りなかった位の高く由緒正しき妻が与えられるということからも身分が重要になってくる。女三宮が、皇系から退いておりながら栄華を極め、準太上天皇の位にある光源氏のもとに降嫁し、それまでであった六条院世界の序列を覆して正妻格としての扱いを受けるには高貴性や高貴であるが故の外部からの圧力が必要であったろう。そして、間接的に六条院世界の秩序を乱すという関係を形成し紫の上を発病へと至らしめるために、女三宮の高貴性は必要であったと考えられる。

また、この高貴性こそが「高き心ざし」(若菜上三十七頁)「皇女たちならずは得じ」(若菜上三十七頁)という柏木の女三宮思慕の契機であった。この柏木の性格について高橋亨氏は「源氏物語の(ことば)と(思想)―女三宮―柏木物語」(※⑨)において以下のように述べられている。

身分や血筋という(名)に価値をおき(美)を見ないという性格において徹底していた。(中略)女三宮は(女三宮)という名目的存在であることが絶対的意味であった(後略)

柏木は事実を見ずに盲目的に幻想を抱く性質を孕み、それゆえに柏木の皇女崇拜の意識は、女三宮が光源氏のもとに嫁いだ後も何年も忘れることができず、異常なまでの思慕を抱くことに繋がる。そして、蹴鞠の際の垣間見を契機に幼少時から朱雀院に寵愛され、今上帝や光源氏という後ろ盾を持つ「最上の皇女」女三宮への恋慕・執着が女三宮本人へと変化し、柏木は女三宮の部屋に忍び入った際に「ただかばかり思ひつめたる片はし聞こえ知らせ、なかなかかけかけしきことはなくてやみなむ」(若菜下二二五頁)という思いであったのに、気高く気の引ける姫を想像していたのに反して実際は「なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひのあてにいみじく思ゆることぞ」(若菜下二二五頁)と、内実の食い違いに冷静さを失い密通事件を起こしてしまう。このことから、女三宮が強調され続け「幼さ」と共に高貴性を付与されていることは柏木が女三宮思慕をする契機であるとともに、冷静さの欠落を招き密通事件を引き起こす装置として必要であったと考えられる。

第二節 密通の契機と「古い」の問題

女三宮と柏木の密通事件の契機は六条院での蹴鞠の際の垣間見である。前の節でも述べたように、皇統から遠い柏木は「高き心ざし」(若菜上三十七頁)「皇女たちならずは得じ」(若菜上三十七頁)という思いから高貴性をもった女三宮に異常なまでの恋慕を募らせている。そしてその想いは、女三宮が光源氏により激化していき、垣間見を可能にした一要因には女房の質的問題が挙げられるが、これについては第一章第一節でも述べたように「光源氏と紫の上との女房」と「朱雀院と女三宮とその女房」といった対比的構図が基盤となり夕霧の女三宮評においても以下のように描かれている。

女房などもおとなしくしきは少なく、若やかなるかたち人の、ひたふるにうちはなやぎ、されはめるはいと多く(若菜上三十三頁)

女三宮は感情を露わにせず、人のいいなりになるばかりである。女房の配慮や思慮が欠落しているのは密通事件を引き起こす伏線とも感じられる。そして、柏木がこの垣間見を期に女三宮の「幼さ」を見ずに虚像に対しての憧れだけが強まり、冷静さを欠いていることが以下の箇所からうかがえる。

宰相の君は、よろづの罪をもさをさたどられず、おほえぬ物の隙より、ほのかにも、それと見たてまつりつるにも、わが昔よりの心ざししるしあるべきにやと契うれしき心地して、飽かずのみおほゆ。(若菜上二四四頁)

さらにこれについては、密通時に女三宮を見た際の柏木の「なつかしくらうたげに、やはやはとのみ見えたまふ御けはひの、あてにいみじく思ゆることぞ」(若菜下二二五頁)という言葉からもうかがえ、この女三宮の内実の食い違い「幼さ」に一層の想いが重なり密通を引き起こし、ここでも女三宮の「幼さ」が物語の主軸に大きく影響を成している。しかしながら、この密通は光源氏や紫の上が六条院を退出し、六条院の人氣がなくなっているという状況があつて可能となつたことにも注意しなければいけない。

そもそも「高き心ざし」(若菜上三十七頁)「皇女たちならずは得じ」(若菜上三十七頁)と願いながらも柏木が女三宮との結婚を成し得なかったのには、表面的には柏木の社会的地位の低さが関係しているが、このことについて曾根誠一氏は「女三宮―悲劇のヒロイン―」(※⑩)において以下のように述べられている。

この二人「夕霧と柏木」は「婿選びから」排除されることによつて逆に、光源氏の行動を批判・相対化する役割を担う(中略)柏木による光源氏批判・相対化を考えると、正妻女三の宮と密通し光源氏の権威を相対化したことが最大の出来事である(中略)第一部では生じえなかつた事態を描くことを通して、光源氏の「古い」がここでの課題として呈示されているのだとい

えよう。  
一一内は中村が補足

「親さまの夫」としての結婚を果たすこと自体が光源氏の「老い」の現れであるが、絶対者として描かれていた光源氏が取るに足らない柏木によって権威侵害されることにより「老い」の現れが物語内において表面化してきているのである。光源氏対柏木の関係性は老いと若さとも言えるのではないだろうか。そして、次の時代を担う夕霧や柏木といった人物に批判・相対化されることで光源氏の「老い」は強調されていくのである。光源氏は二条院、二条東院、六条院と自らの住居を拡大してきたが、これらがそのまま宰領している世界に通じており、この「老い」は六条院と一体的で、光源氏の理想性の形象化された六条院の栄華の陰りが示唆されていると考えられる。

### 第三章 女三宮の成長

#### 第一節 「紫のゆかり」の意義

若菜において朱雀院の語り出しから突如女三宮が登場し、藤壺のもう一人の姪の「紫のゆかり」であることが明らかにされていく。そしてその後も女三宮が「紫のゆかり」であることが繰り返され強調的に描かれている。

かの母女御の御方さまにても、疎からず思し数  
まへてむや（若菜上五二、三頁）

尋ねたまふべきゆゑもやあらむとぞ。（若菜上  
七五頁）

おなじかざしを尋ねきこゆれば、かたじけな  
れど、分かぬさまに聞こえさすれど（若菜上九  
二頁）

この節では女三宮が「紫のゆかり」として物語に登  
場したのはなぜなのかその意義について考察してい  
きたい。

女三宮の降嫁は第一章第二節でも述べたように「親  
さま」の結婚であり朱雀院は紫の上養育の過去の再現

を光源氏に求めて、光源氏の「紫のゆかり」をゆかし  
く思う気持ちから女三宮の降嫁に至るのであり、女三  
宮が「紫のゆかり」である一要因である。女三宮は六  
条院に降嫁してきて紫の上の住んでいる南の御殿の寢  
殿に入るのがそのことについて大朝雄二氏は  
『源氏物語正篇の研究』（※⑩）において以下のように  
述べている。

准上天皇の威勢をもつてすれば、いま女三宮  
を新しく迎えるに当って、まったく別な新居を  
造営してもよかつたはずであるし、二条院ない  
しは東院を改造して内親王にふさわしい場を作  
ることはいくらでも可能であつたはずである。  
あるいは又、朱雀院の遺産として女三宮の邸を  
与えることも容易であつたと思われるにもかか  
わらず、女三宮の入るべき場所は紫の上の住む  
南の御殿の寢殿以外のどこでもなかつたとい  
所に、作者の意図した新しい緊張関係がかな  
るものであつたかを明白に指し示している（後  
略）

女三宮が南の御殿に入ることは、それまで六条院の  
女主人として立場の確立していた紫の上との交替を意  
味しているのではないだろうか。このことは第二章第  
一節で述べた高貴性を付与され、絶対的な身分差で正  
妻格であった紫の上を退ける点からも六条院の女主人  
の交替の可能性が示唆されているだろう。そして、こ  
の女主人の交替を決定的に表しているのが女樂であり、  
女三宮への琴の琴の伝授の時間が紫の上と光源氏  
の過去の再現となり、紫の上の「娘さまの妻」として  
の特権をも奪い去り、紫の上は病へと向かうのである  
が、この病の原因はそれだけではなく若菜の始まりか  
ら表れている。

かく空より出で来にたるやうなることにて、の  
がれたまひがたきを、憎げにも聞こえなさじ、  
わが心に憚りたまひ、諫むることに従ひたまふ  
べき、おのがどちの心より起これる懸想にもあ  
らず、堰かるべき方なきものから、をこがまし  
く思ひむすほはるさま、世人に漏りきこえじ  
（若菜上五三頁）

ここで紫の上の絶対的な優位は消失し、以後嫉妬の  
情を見せまいと振る舞う姿が続いて精神的な疲労が重  
なり、女樂を境に病床につくのである。紫の上が女三  
宮と対立するのではなく従姉妹としても、親子ほどに  
年の離れ女三宮が「いと幼げにのみ見えたま」う状況  
においても嫉妬の情を見せまいと感じたことが、女三  
宮との対面においてうかがえる。

いと幼げにのみ見えたまへば心やすくて、おとなお  
となしく親めきたるさまに、昔の御筋をも尋ねきこえ  
たまふ。（若菜上九十頁十五行目～九二頁一行目）

ここで紫の上が「親めきたるさま」に接することが  
できるのは、朱雀院に両者の関係を言及された上で教  
育的配慮を求められていたことに加え、「いと幼げに  
のみ見えたま」う女三宮の姿に安心し、生来からの子  
どもを好む性格が現れたからであり、女三宮がただ  
幼いばかりであることが紫の上の心余裕を持たせ、  
さらに自尊心を抱かせている。また、それを前提とし  
て同じ血筋であることに紫の上自身も言及して融和の  
姿勢を見せており、この点においても女三宮が「幼さ」  
の強調される「紫のゆかり」である必要性があるだろ  
う。

また、第二部においての密通事件では女三宮が「紫  
のゆかり」であるが故に「藤壺―光源氏―桐壺」と「女  
三宮―柏木―光源氏」の構図が想起され、光源氏に強  
調的な回顧の場が与えられているのであるが、密通事  
件が三者の中で露見する点が藤壺密通事件と柏木密通  
事件の違いであり、その違いこそが栄華を極めた光源  
氏に晩年に至って若き日の過去の回顧を強調的にさせ  
ているのである。

しかし、因果応報としてこの問題を考えると本来で  
あれば「藤壺―光源氏―桐壺」に対応する構図は愛妻  
と実子である子息の「紫の上―夕霧―光源氏」となる  
はずであるが、この構図が在り得なかつたことについ  
て大朝雄二氏は『源氏物語正篇の研究』（※⑪）にお  
いて以下のように述べている。

藤壺の事件は何らかの形で応報を見なければなら  
ない根源的な宿命のモチーフでありながら、  
紫の上も夕霧もその事件の当事者になるような  
造型はされていないという点に注意を払う必要

があるとおもわれる。

これに加えて氏は同書で光源氏の年齢的契機と密通の関わりについても述べられている。

女三宮の密通が実現するのは源氏四十七歳という衰えの中でなければならなかったという点で、事件の展開は厳しく彼の年齢的契機に従っている(後略)

夕霧が紫の上を垣間見、秘かに懸想していながらも密通に至らないことは根本的な人物造形や光源氏の年齢的契機に関わっており、その中で藤壺事件の照応として物語に出てくるのが「紫のゆかり」としての女三宮なのであり、女三宮が第二部において突如「紫のゆかり」として語り出された最大の要因なのであろう。

## 第二節 柏木の死

第一部では「藤壺―光源氏―桐壺」の関係において第二部では「女三宮―柏木―光源氏」の関係において密通事件が起こり、その両者は異常なまでの恋慕や形代を愛でること、「紫のゆかり」の関係性など重なり合う部分がある。しかし、第一部において光源氏は后であり継母でもある藤壺と近親相姦を犯しているにも関わらずその罪障意識はさほど描かれていないが、第二部での女三宮や柏木は畏怖や懊悩から出家や死を遂げるといった描かれ方をしている。このことについて三谷邦明氏は「若菜の方法―自己意識の文学」(※12)において以下のように述べられている。

第一部では、登場人物の自己意識ではなく、作者の視点からの出来事の解釈が主軸であるという創作方法から判断すれば、こうした罪過のみを描き出す表現構造は必然だったといえよう。(中略)女三宮の出家も柏木の死も、この罪過に対する自己意識の対話が見出した囚われた真理なのであって(後略)

第一部では作者の視点からの出来事の解釈が中心であったのに対して、第二部では女三宮や柏木が光源氏に畏怖し、懊悩から出家や死を遂げるといった自己の

内面性が物語に大きく作用している。この節では柏木が光源氏の「目」を異常なまでに恐れ死んでいくことについて考察していきたい。

第二章第一節で述べたように柏木は事実を見ずに盲目的に幻想を抱く性質を持っている。そして、密通後に内的独白において自分の犯した過ちについて慄き、光源氏の「目」を恐れている。

i さてともいみじき過ちしつる身かな、世にあらむことこそまばゆくなりぬれ、と恐ろしくそら恥づかしき心地して、歩きなどもしたまはず。帝の御妻をもとり過ちて、事の聞こえあらむにばかりおぼえむことゆゑは、身のいたづらにならむ苦しくおぼゆまじ。しかいちじるき罪には当らずとも、この院に目を側められたてまつらむことは、いと恐ろしく恥づかしおぼゆ。(若菜下二二九、二二〇頁)

ii 一つのほどにさること出で来けむ、かかることは、あり経れば、おのづからけしむにても漏り出づるやうもやと思ひしだいにとつつましく、空に目つききたるやうにおほえしを、まして、さばかり違ふべくもあらざりしことどもを見たまひてけむ。(中略)年ごろ、まめ事にもあだ事にも召しまつはし、参り馴れつるものを、人よりはこまやかに思しとどめたる御気色のあはれになつかしきを、あさましくおほけなきものに心おかれたてまつりては、いかでかは目をも見あはせてまつらむ、さりとて、かき絶えほのめき参らざらむも人目にあやし、かの御心にも思しあはせむことのみみじさ。(中略)さして重き罪には当たるべきならねど、身のいたづらになりぬる心地すれば、(若菜下二五七、八頁)

i は密通後の後朝において、ii は密通の事実が光源氏に露見したことを小侍従に告げられた時のものである。i もii も光源氏を絶対者としその目を恐れていること、「身のいたづらにならむ苦しくおぼゆまじ」から「身のいたづらになりぬる心地すれば」と変化していること、「しかいちじるき罪には当らずとも」「重き罪には当たるべきならねど」と罪としては重いもので

ないという意識があることがうかがえ、i からii に向け柏木の思いは深化し、光源氏に密通の事実を知られたことよって世に生きながらえることに引け目を感じている。

また、試楽において六条院に参上した際に光源氏の独白を聞き柏木は恐れていた「目」に決定的に敗れ、病の床に臥してしまう。

「過ぐる齡にそへては、酔泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門督心とどめてほほ笑まるる、いと恥づかしや。さりとて、いましばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老いは、えのがれぬわざなり」とてうち見やりたまふに、人よりけにまめだち屈じて(中略)いとど胸つぶれて、(中略)いといたくわづらひたまふ。(若菜下二八〇頁)

この試楽を境に病が重くなったことは柏木自身も語っている。

なほけはひわづらはしう、かの御心にかかる咎を知られたてまつりて、世にながらへむこともまばゆくおほゆるは、げにことなる御光なるべし。深き過ちもなきに、見あはせてまつりし夕のほどより、やがてかき乱り、まどひそめにし魂の、身にも還らずなりにしを(柏木二九四頁)

この後、「心苦しきをたひらかにとだにいかで聞きおいたてまつらむ」(柏木二九五頁)と願い、女三宮が薫を出産し出家を果たすと「泡の消え入るやうにて亡せたまひぬ」(柏木二二八頁)と最期を迎える。

柏木は自分の犯した過ちを帝の御妻と密通するよりは、大罪ではないとしながらも光源氏を絶対視し、その威光を恐れ生きながらえることに引け目や憚りを感じて試楽を境に死に向い、女三宮との仲らいを振り返り、人生の無常を感じて死に至る。この柏木の死は、女三宮が「いと心憂きことと思ひ懲りにしかば、いみじうなむつまじき」(柏木二九二頁)と拒絶を見せ、柏木を顧みることなく出家してしまうことによる無常を強調するとともに、取るに足らない男に女を奪われる男として描かれた光源氏が「老い」を感じつつも超

絶的な人物であることを強調するために必要だったのではないだろうか。

### 第三節 女三宮の出家

この節では、周りの人物の言いなりになり自身の意思で行動することのなかった女三宮が、密通を契機に感情を表し始め、出産の後に朱雀院に出家を願い、出家を果たすことの意義について、若菜上巻以降から出家後の生活ぶりが語られる鈴虫巻までの叙述や歌(その他の歌や訳については資料4参照)から考察していく。

女三宮の登場は若菜上巻において朱雀院の語り出しにおいてである。この後より、女三宮について心身ともに幼い状況が朱雀院をはじめとして、紫の上と女三宮の対面の条までに様々な人物によって語られていく(資料1)のであるが、同時に女三宮が自身で行動せず感情を見せない自主性を欠いた空虚な人物として描かれている。

御乳母、「さ聞こえさせはべりぬ」とばかり、言葉に聞こえたり。(若菜上七〇頁)

ただ聞こえたまふままに、なよなよとなびきたまひて、御答へなどもおぼえたまひけることは、いはけなくうちたまひ出でて(若菜上七四頁)

そんな女三宮が、感情を表出させるのが光源氏による琴の琴伝授の折である。

何心なくうち笑みて、うれしく、かくゆるしたまふほどになりけると思す。(若菜下一八四頁)

女三宮が「そのほど御年十三四ばかりにおはす(若菜上一八頁)と物語に登場してから自身の感情が表出するまでに「二十三四ばかりになりたまへど」(若菜下一八四頁)と約七年の月日を経ている。しかし、自身の感情を表出させた女三宮は同時に以下のように描かれている。

なほといみじく片なりにきぎはなる心地し

て、細くあえかにうつくしくのみ見えたまふ。(若菜下一八四頁)

感情を見せ始めた女三宮の「幼さ」は以前と相違ないであり、この女葉の後紫の上が病に伏し、女三宮が「うち笑み」ることにはないのである。この「うち笑み」が琴の琴伝授の折りに語られるのは女葉において六条院の栄華を際立たせ、琴の琴伝授の時間自体が紫の上が病に向かう時間としてあり、女葉を終えて後に六条院が崩壊に向かうことを強調するものであると考えられる。それとともに、琴の琴伝授により光源氏と女三宮の関係性が育まれ、その折に「うち笑み」ることによって出家後、拒絶を見せた女三宮が鈴虫巻において光源氏の頻繁な訪問をわずらわしく思いながらも「宮の御数珠引き怠りたまひて、御琴になほ心入れたまへり」(鈴虫三八二頁)と昔を懐かしむといった人間性を見せるためにも一度きりの「うち笑み」が必要であったのだと考えられる。

次に、女三宮が感情を表出するのは、柏木が光源氏不在の六条院に忍び入った際である。

宮は、何心もなく大殿籠りにけるを、近く男のけはひのすれば、院のおはすと思したるに、うちかしまりたる気色見せて(中略)あさましくむくつけくなりて、人召せど、近くもさぶらはねば、聞きつけて参るもなし。わななきたまふさま、水のやうに汗も流れて、ものもおぼえたまはぬ気色、いとあはれにらうたげなり。(若菜下二二四頁)

「わななきたまふさま、水のやうに汗も流れて、ものもおぼえたまはぬ気色」と恐怖を見せつつも何もすることができずにいる女三宮の姿が語られ、その後垣間見の事実を柏木に聞き「げに、さはあたりけむよと口惜しく」(若菜下二二六頁)と感じる。以後、言いつく寄る柏木の思いや世離れを恨んでいるとの光源氏の解釈に対しての女三宮の心情が語られ(資料2参照)、光源氏への密通の発覚を恐れ苦悩しつつも光源氏を引きとめようとする姿が描かれていく。

夕露に袖ぬらせとやひぐらしの鳴くを聞く  
起きて行くらん(若菜下二四九頁)

ここで女三宮が光源氏を引き留めるのは、三村友希氏が「女三宮は、あれから時折訪れる柏木から守ってほしかったのであるうか」(※⑦)と述べる通り、「わりなく思ひあまる時々は夢のやうに見たてまつり」(若菜下二四三頁)柏木の通いから守ってほしかったためだと考えられる。しかし、この女三宮の光源氏への思いも柏木からの恋文を発見されたことを契機に冷遇され(資料3)、拒絶へと変化していく。

この女三宮の拒絶が初出するのは病床に臥した柏木の「あはれ」の求めに対してであり、以下のように頑なに返事を書こうとしない箇所においてである。

「我も、今日か明日かの心地しても心細ければ、おほかたのあはればかりは思ひ知らるるれど、いと心憂きことと思ひ懲りしかば、いみじうなむつつましき」(柏木二九二頁)

しかし、この箇所においての女三宮の拒絶は「御心本性の、強くづしやかなるにはあらねど、恥づかしげなう御気色のをりをりまほならぬがと恐ろしくわびしきなるべし」(柏木二九二頁)と語られており、思慮の深さによるものでなく光源氏へのおそれ故であることがうかがえる。そして薫君を出産の直後に「さはれ、このついでにも死なばやと思す」(柏木三〇〇頁)「尼にもなりばや」(柏木三〇一頁)と思ひ光源氏以下のように出家を願う。

「なほ、え生きたるまじき心地なむしはべるを、かかる人は罪も重かなり、尼になりて、もしそれにや生きたると試み、また亡くなるとも、罪を失ふことにもやとなむ思ひはべる」(柏木三〇一頁)

さらに女三宮は、光源氏が朱雀院に「かく聞こえたまふさま、さるべき人して伝へ奏せさせたまひ」(柏木三〇三頁)たのを聞き、朱雀院が夜の闇に紛れて六条院を訪れた際に泣きながら以下のように願う。

「生くべうもおぼえはべらぬを、かくおほしまいたるつひでに、尼になさせたまひてよ」(柏木三〇五頁)

光源氏は女三宮の出家を引き留めようとするが、女三宮は「頭ふりて」（柏木三〇七頁）と拒絶を見せ、光源氏は「つれなくて、恨めしと思すこともありけるにや」（柏木三〇八頁）と改めて感じる。ここで出家を懇願された朱雀院は以下のように考え出家を認める。

おほかたの後見には、なほ頼まれぬべき御おきてなるを、ただ預けおきたてまつりしるしには思ひなして（柏木三〇六―七頁）

これについて、三村友希氏（※⑦）は以下のように述べられている。

朱雀院はもう、〈父〉としても〈夫〉としても光源氏を信頼していない。ただの後見人としての役割だけが光源氏に残された。女三宮は、仏道を通して、父朱雀院のもとに回帰していく。

父朱雀院は「もう一人の〈紫の上〉」への限界を目の当たりにし、出家という形で夫婦としての離別を実行して、女三宮は「もう一人の〈紫の上〉」への成長を離脱する。そして、引き留める光源氏を差し置いて出家という形の夫婦の離別をすることで、光源氏を公私ともに拒絶することができるのであって、そのためにも出家という手段をとる必要があったのだと考えられる。

この後女三宮は「かかるさまの人は、もののおはれも知らぬことにて、いかがは聞こゆべからむ」（三二二頁）と拒絶を続け、鈴虫巻で光源氏の「はちす葉をおなじ台と契りおきて露のわかるる今日ぞ悲しき」（鈴虫三七六頁）という歌に対し、決定的に拒絶を見せその姿勢を強調している。

「へだてなくはちすの宿を契りても君が心やすまじとすらむ」（鈴虫三七六、七頁）

また、中秋十五夜の遊宴の条において女三宮は光源氏に以下のように贈歌している。

「おほかたの秋をばうしと知りにしをふり棄てがたき鈴虫の声」（鈴虫三二八―二頁）

女三宮は「秋」と「飽き」を掛け光源氏をうらめしく思うのであるが、ここに来て光源氏は「忍びやかにたまふ、いとなまめいて、あてにおほどかなり」（鈴虫三八二頁）と評するのであって、登場してから自主性を欠いた空虚な人物として描かれた女三宮は、密通を契機に内面を表し始め、出家を境に自身の意思を主張していくのであり、全てにおいて未熟で幼かった女三宮が出家という手段を媒介に自主性を獲得したことに於いて、紫の上と重ねられつつも〈幼い〉人物として描かれた女三宮の出家の意義があるのだと考えられる。

### 〈結論〉

女三宮の強調される〈幼さ〉は「おほしたて」の違いを具現化した朱雀院対光源氏の優劣の構図を示しているとともに、紫の上と同じく光源氏に〈養育される〉人物となる上で必要な設定であり、同じ「紫のゆかり」として相対化され紫の上の正統性を証明し、光源氏の「老い」が表面化して上の降嫁を実現させる要因として必要だった。それに加えて、この上ない高貴性を付与されることで六条院世界に外部の力を介入させることを可能に為らしめ、柏木の皇女崇拜の意識に異常なまでに作用し密通の契機となり得たのであり、〈幼さ〉と高貴性により密通が引き起こされた。

この密通は光源氏に回顧の場を強制的に与えるのであるが、女三宮が「紫のゆかり」として語り出されたのは藤壺との密通の照応として、紫の上の身代りの存在意義を有しているのではないかと考えられる。柏木と女三宮は畏怖や懊悩から出家や死を迎えるが、物語の冒頭から感情を表さず自主性を欠き空虚な人物として語られていた女三宮は出家を境に成長を見せる。女としての生を捨て尼となり光源氏を拒絶する手段は、女三宮が光源氏に対して見せた抵抗であり、同じ「紫のゆかり」として重ねられつつも出家を許されなかった紫の上とは異なり、「もう一人の〈紫の上〉」にどの期待から離脱し、自主性の獲得を為しえさせ、物語において新しい女の生き方を示すことになったのではないだろうか。そして、この女三宮の生き方が第三部において浮き舟物語として受け継がれていくという点にお

いて女三宮の第二部においての役割があったと考えられる。

### 〈参考・引用文献〉

- ※① 『新編日本古典文学全集 源氏物語』（全十六巻）阿部秋生他編 株式会社小学館
- ※② 『源氏物語』 秋山虔著 昭和四三年一月二〇日発行 株式会社岩波書店
- ※③ 『源氏物語事典下巻』 池田亀鑑編 昭和三五年六月発行 株式会社東京堂
- ※④ 『源氏物語の女性像』 武者小路辰子著 昭和四一年四月三〇日発行 株式会社角川書店
- ※⑤ 『別冊国文学 新・源氏物語必携』 秋山虔編 平成九年五月一〇日発行 株式会社学燈社
- ※⑥ 『人物で読む源氏物語 女三宮』 池田節子著 平成一六年五月三〇日発行 勉誠出版株式会社
- ※⑦ 『姫君たちの源氏物語 二人の紫の上』 三村友希著 平成二〇年一月一〇日発行 翰林書房
- ※⑧ 『若菜への出発―源氏物語の転換期―』 石津はるみ著 『国語と国文学』 昭和四九年一月月号 昭和四九年一月一日発行 東京大学国語国文学会
- ※⑨ 『源氏物語の〈ことば〉と〈思想〉―女三宮Ⅱ 柏木物語』 高橋亨氏著 『国語と国文学』 昭和四八年二月月号 昭和四八年二月発行 至文堂
- ※⑩ 『女三宮―悲劇のヒロイン―』 『国文学解釈と鑑賞』 曾根誠一著 平成十六年八月一日発行 至文堂
- ※⑪ 『源氏物語正篇の研究』 大朝雄二著 昭和五十年十月三十日発行 桜楓社
- ※⑫ 『若菜の方法―自己意識の文学―』 三谷邦明著 『日本文学』 昭和四九年一月月号 昭和四九年一月発行 日本文学協会刊行

《資料》

※1234 『新編日本古典文学全集 源氏物語④』

平成八年一月一日〇日発行

阿部秋生他編 株式会社小学館

資料1

- ・ 姫宮のいとうつくしげにて、若く何心なき御ありさまなる(若菜上二七頁)
- ・ 姫宮は、あさましくおほつかなく心もとなくのみ見えさせたまふ(若菜上三二頁)
- ・ あやしくものはかなき心さまにやと見ゆる御さまなる(若菜上三四頁)
- ・ 姫宮は、げにまだいと小さく片なりにおはする中にも、いとはけなき気色して、ひたみちに若びたまへり。(若菜上六二二頁)
- ・ いとはけなき御ありさまなれば、乳母たち近くさぶらひけり。(若菜上八八頁)
- ・ 御手、げにいと若く幼げなり。(若菜上七二二頁)
- ・ 姫宮は、げにまだいと小さく片なりにおはする中にも、いとはけなき気色して、ひたみちに若びたまへり。かの紫のゆかり尋ねとりたまへりしをり思し出づるに、かれはされて言ふかひありしを、これは、いとはけなくのみ見たまへば(若菜上六十三頁)
- ・ 女宮は、いとらうたげに幼きさまにて、御しつらひなどのことごとしく、よだけく、うるはしきに、みづから何心もなくものはかなき御ほどにて、いと御衣がちに、身もなくあえかなり。ことに恥ぢなどもしたまはず、ただ児の面嫌ひせぬ心地して、心やすくうつくしきさましたまへり。(若菜上七十三頁)
- ・ 姫宮は何とも思したらぬを、御後見どもぞやすからず聞こえける(八六頁)
- ・ いと幼げにのみ見えたまへば心やすくて(若菜上九〇頁)

資料2

- ・ よろづに聞こえ悩ますも、うるさくわびしくて(若菜下二二七頁)
- ・ いとうしと思ひきこえて(若菜下二二七頁)
- ・ はていかにしつるぞとあきれて思さる。(若菜下二二七頁)
- ・ いとめづらかなりと思して(若菜下二二八頁)
- ・ ただ今しも人の見聞きつけたらむやうにまばゆく恥

づかしく思さる(若菜下二二〇頁)

いとほしく心苦しき思されて(若菜下二二二頁)

・ 御心の鬼に、見えたてまつらんも恥づかしうつましく思す(若菜下二四六頁)

・ むつかしき物見するこそいと心憂けれ。心地のいどあしきに(若菜下二四七頁)

・ いとど胸つぶるる(若菜下二四八

資料3

- ・ 姫宮は、かく渡りたまはぬ日ごろの経るも(若菜下二五七頁)
- ・ 思はず思ひきこゆることありとも、おろかに人の見咎むばかりはあらじとこそ思ひはべれ。(若菜下二六八頁)
- ・ 今さらに思はずなる御名漏り聞こえて、御心乱りたまふな。この世はいと安し。事にあらず。後の世の御道の妨げならむも、罪いと恐ろしからむ(若菜下二七〇頁)
- ・ とりわきても見たてまつりたまはずなどあれば、老いしらへる人などは、「いでや、おろそかにもおはしますかな。めづらしうさし出でたまへる御ありさまの、かばかりゆゆしきまでにおはしますを」とうつくしきこゆれば、片耳に聞きたまひて、さのみこそは思し隔つることもまさらめと恨めしう、わが身つらくて、尼にもなりばやの御心つきぬ。(柏木三〇〇〜三〇一頁)
- ・ 夜なども、こなたには大殿籠らず、昼つ方などぞさしのぞきたまふ。(柏木三〇一頁)

資料4

- ・ 《女三宮↓光源氏》
- ・ 夕露に袖ぬらせとやひぐらしの鳴くを聞く聞き起きて行くらん
- ・ 「夕露に袖を濡らして泣けというおつもりでしようか、鯛が鳴くのを聞きながら起きてお帰りになりますのは」
- ・ 《光源氏↓女三宮》
- ・ はちす葉をおなじ台と契りおきて露のわかるる今日ぞ悲しき
- ・ 「来世は極楽で同じ蓮の台の上に生まれ変わろうとお約束はしますもの、しかしこの世では露のこぼ

れるように別れて暮さなければならぬのが悲しいのです」

《女三宮↓光源氏》

・ へだてなくはちすの宿を契りても君が心やすまじとすらむ

・ 「来世は同じ蓮の台、とお約束なさいましても、あなたのお気持ちは、この私をお許しにならず、いっしょに住もうとはなさらないのでしょうか」

《女三宮↓光源氏》

・ おほかたの秋をばうしと知りにしをふり棄てがたき鈴虫の声

・ 「秋といえはいつたにたつらく厭わしいものと知っておりました私ですのに、鈴虫の声を聞くと、その秋も振り捨てにくうございます」

※「」内はテキストの訳参照

(なかむら のぞみ・釧路校四年)

感想文部門 佳作

全ての出逢いに感謝すること

谷口 彩



「お姉ちゃんありがとう。」

2年ぶりに友人に会うために乗り込んだ電車で、たまたま隣に乗り合わせた女の子に言われて嬉しかった言葉です。その子にとってその日は、初めて電車でおばあちゃんの家に行く大冒険の日でした。その子は、電車に乗り私の隣の席が空いているのを見つけると、「岩見沢市に着いたら教えてもらえますか。」と頼んできました。それから岩見沢市に到着するまでの約1時間の間、その子とおしゃべりをし、無事におばあちゃんとお会いする様子を届けた思いがあります。小説「阪急電車」は、そんな懐かしく嬉しい思い出を思い出させてくれる小説でした。

兵庫県には、兵庫県宝塚市の阪急宝塚駅から兵庫県西宮市の西宮北口駅を経て、阪急今津駅までを結ぶ阪急今津線という路線があります。阪急神戸本線との接続駅であり、運転系統が分割される西宮北口駅から宝塚駅までは、所要時間約15分のミニ路線です。小説「阪急電車」は、その宝塚駅から西宮北口駅間の8つの駅を舞台とし、乗客が織り成す様々なエピソードを、1往復に当たる全16話で描写していく物語です。いつも同じ図書館に通い阪急電車から見える景色がきっかけで急接近する男女征志とユキ。後輩に婚約者を寝

取られたOL翔子。彼氏のDVに悩む女子大生ミサ。夫が亡くなってから息子夫婦との関係がぎくしゃくしている老婦人時江。セレブ気取りの奥様方との付き合いに疲弊する庶民的な主婦康江。おしゃれな大学になかなか馴染めないでいる地方出身の男女圭一と美帆。年上の会社員と付き合いながら、憧れの大学受験を諦めきれない女子高生悦子。いじめと戦う少女シンヨーコ。電車内という限られた空間で、それぞれの人生がほんの少し重なり合い、影響し合い、そこに生まれる小さな愛の奇跡が描かれている小説です。

この小説で印象に残った場面が2つあります。まず1つは、女子大生ミサと老婦人時江の出会いの場面です。ミサは友達からも羨ましがられる「イケメン」の彼氏と交際しているのですが、その彼氏からのDVに悩まされていました。一緒に住む部屋を探しに行こうと、ある日2人で物件を見に行く途中、偶然車内に乗り合わせた純白のドレス姿の女性（翔子）について話しているうちに、くだらない口論となり激昂した彼氏が、謝って引き止めようとしたミサを振り払い、競馬に行ってしまう。『くだらない男ね。やめておけば？苦勞するわよ。』とそれを見ていた老婦人（時江）に吐き捨てられた言葉で、ミサは別れを決意する

のです。そんなふうに扱われることは日常茶飯事で、悲しいなどとは思わなくなってしまっていたミサの心を、一瞬にして引き戻した場面に驚愕しました。ただ電車に乗り合わせただけの人の言葉で、その人の人生が変わることが有り得るのかと感銘を受けました。他人にはつきりと助言ができる時江さんのかっこよさと、他人の助言を素直に受け止めることのできるミサさんの純粹さに心が打たれました。

私自身、全くの他人ではありませんが、助言をしていただいたことで人生が変わったという経験があります。中学3年の冬、高校受験に失敗した私は、滑り止めとして受験していた私立高校に入学することになりました。その私立高校は、全日制普通科コースの中に、国立公立大学及び有名私立大学に現役合格を目指す人たちが集まる勉強一本の特進コース、文武両道を目的とし進学を目指す選抜進学コース、部活動や就職活動に力を注ぐ総合コースの3つのコースがあります。私は総合コースに入ること以外は考えていませんでした。そんな中、当時担任であった先生が面談をして下さり、その時に「お前は特進コースに入りなさい。そして大学に行きなさい。」という言葉くれたのです。勉強ばかりの特進コースは絶対に嫌だと思っていたので、

その言葉を言われたときは嫌な気持ちになりました。その場ですぐに決断することが出来ず、家に帰り両親と相談をしながら1日自分の将来について真剣に考えたことを覚えています。そして、全く視野に入れていなかった特進コースへ入ることを決めました。いつも親身になって接してくれ、教師つていいなと思わせてくれた恩師だからこそ、その先生の言葉を信じてみようと思いましたが、私がミサのようにたまたま居合わせただけの人に言われていたとしたら、素直にその助言を受け入れられなかったと思います。その先生の助言がなければ、高校受験直後に大学受験のことなどは一切考えられず、楽しい高校生活を夢見て総合コースに進学し、大学に合格することはできず、価値観や性格、人生そのものが変わっていたことと思います。本当に感謝しています。私の人生の中の印象的な出来事として、中学校教師の言葉が強く頭に残っています。これまでの人生に改めて目を向けると、そのタイムミング、その瞬間でしか出逢うことの出来ない人や言葉に、どれだけ影響され、支えられて生きてきたのかということに気付かされました。

そして、この小説で印象に残った場面の2つ目は、小林駅での場面です。会社の同僚でもある婚約者を後輩に寝取られてしまった上に、新婦が妊娠をしたことで彼氏に別れを切り出された翔子は、復讐のために2人の結婚式に出席しました。その帰宅途中、偶然乗り合わせた老婦人(時江)に声をかけられ、抑えていた感情が一気に溢れ出してしまいます。そのとき翔子は、その老婦人に2つの忠告を受けました。それは、『気が済んだところでできれば会社を辞めなさい。』『もしよかつたら、小林駅で降りるといいわ。あそこはいい駅だから。』というものでした。たった一駅の間で率

直な会話を交わした老婦人の勧め通りに、翔子は小林駅で途中下車することにします。その小林駅というのは、一見ごく普通のように思える駅でしたが、人の温かさに包まれる素敵な駅でした。駅にあった張り紙、スパーマーケットの心遣い、掲示板から分かる町の人の温かさ。少し顔を上げて辺りを見回してみると、普段何気なく過ごしている当たり前だと感じて気付けなかったかもしれない小さな優しさに気付くのだなと思わせてくれる小林駅でのエピソードでした。

私は、この小説から2つのことを学びました。

まず1つは人と人とのつながりです。名前も知らない人たちは、私の人生に何の影響ももたらさないし、私の人生も誰にも何の影響も与えないと思つていましたが、この小説を読んで人はこのように、知らず知らずの間にわずかでも人に影響を与えていくのだと気付くことが出来ました。電車やバスやショッピングモールや道端で、声をかけようかなと思つても止めてしまうことが何度もありました。私も小説「阪急電車」の時江さんや翔子さんやミサさんのように、勇気を出して一歩踏み込んでみようかなと思つて出来ました。「あそこでああ言ってくれたお姉さん元気かな？」と一瞬でも思ってもらえるような人生は、本当に素敵だなと感じることができました。

もう1つは、いろいろなことに目を向けることの大切さです。私は今まで電車やバスに乗るとき、外を歩くときは、いつもウォークマンで音楽を聴いていました。しかし、小説「阪急電車」を読んで、携帯電話や音楽に夢中になり、下ばかり見ているのではなく、自然や建物、空や景色などに目を向け、人の会話や風の音、鳥の鳴き声などに耳を向け、前を向いていたと思うことが出来ました。ほんの些細な発見や気付きや

出逢いが重なり、人生は創られていくのだなと改めて感じることもできる小説でした。

時江さんのように正義を貫き真つ直ぐと意見が言え、翔子さんのように凛々しく自分の信じた道を突き進み、ミサさんのように他人の意見を素直に聞き入れ、悦子ちゃんや美帆ちゃんのように人に愛され、康江さんのように家族思いなそんな大人になっていきたいです。そのためには、この小説を読んで気付けられた、全ての出逢いのおかげで今の私が存在していることを忘れず、一瞬でも関わってくれた人々に感謝し、人と人とのつながりを大切にしてこれから過ごしていきたいです。『人数分の物語を乗せて、電車はどこまでもは続かない路線を走っていく。終着点はきつと笑顔。』

(たにぐち あや・旭川校三年)



## 小説部門 佳作

## お兄ちゃんとの非日常

加藤 亞弓



犬を拾った。  
アパートの階段下で蹲る影を見つけ、恐る恐る覗いた先にいたのがそいつだった。薄汚れていて、足に怪我をしたまだ小さな子犬は、寒空の下で身を寄せ合うように体を震わせていた。

こんな状況ははじめてのことで、思わず誰かに助けを求めようと握り締めた携帯を、それでも最後まで使わなかった事が今思い直しても信じられない。

吠えないか、急に激しく動き出したりしないか。そんなことを考えながら恐る恐る近づいて、ふいに視線が落ちあつた時、その予想外に穏やかで悲しげな黒い瞳を見つめながら、私は思わず手を差し伸べていた。

「うち、おいだよ」

そうして私はその犬を、こっそりと飼うことに決めた。

十月も終わりに近づいた、寒い深夜のことだった。

世の中には事件が溢れている。ニュースにもならない些細なものから、胸を締め付けるような凄惨なものまで、日本中のあちらこちらで何かしらの非日常が起こっているのだ。それなのに、そんな事件だらけの社会に身をおきながら、自分の日常は刺激がなくて代わ

り映えがしない。別に殺人事件に巻き込まれたいなんていう愚かな願望はこれっぽっちもないけれど、ちよつとくらい日常を揺るがす何かがあればと考えてしまうのは贅沢だろうか。生きるのも必死だということも大勢いる中で、親のお金を食いつぶして毎日安穏と暮らしている自分は、この足りないものなど何も無いという生活にこそ、不足を感じてしまう。

そうして刺激を求めて、大学は親元を離れた遠い都会の地に決めた。それでも真新しさにわくわくしたのは最初の半年で、馴染みの無い土地と環境で同じことを繰り返す日々には、一層の虚脱感を感じる今日この頃であった。

そんな折に出会った非日常に私は今、どんな事件を聞くよりも興奮しているし、緊張している。

あの日拾った犬のことは、まだ誰にも気が付かれてはいない。でもいつまでこうして隠していられるかと思うと、不安と共に言いようのない高揚感に包まれた。

「ねえ、今日佳奈の家行ってもいいかな」

いつもより長引いた講義が終わり、逸る気持ちを抑えて机を片付けていると、今まで隣で退屈そうにしてきた美咲がうって変わった明るい様子で声をかけてきた。

「明日経済のテストでしょ。一緒に勉強しない？」

「あー、ごめん。今お兄ちゃん来てるんだよね」

言われて思い出した経済のテストは苦手な範囲で、一緒に勉強という言葉には惹かれたが、まさか誘いを受けるわけにはいかない。申し訳なさそうに両手を合わせて、美咲は残念そうに肩をすくめた。

「そっか、残念。ていうか、佳奈ってお兄さんいたんだ」

別の友達に誘いかけているのだろうか、片手で携帯をいじりながら問いかけてくる美咲に曖昧な笑みを返す。

兄のことを他人に話したことはあまりない。

兄は昔からちよつと変わったところのある人で、大学に入ってから放浪癖までついてしまった。

住所も電話番号も知っているが、連絡が取れたことは殆ど無い。ぶらりとどこかに消えて消息を絶ったかと思つと、突然実家に顔を出すというような人だった。

そんな兄のことは嫌いではないが、かといって特別な思い入れもなく、兄弟ながらにかみどころの無いおかしな人、という印象しかない。

「あまり会わないから。友達に話すような事も特にないんだよね」

「まあ、大学入ると親兄弟なんて帰省の時しか会わ

ないしね。」

そういう理由で会わないわけではないのだが、良いように誤解してくれたのでそのまま相槌を打って席を立った。

思いがけず兄の話に触れたことで急に家の様子が気にかかり、別れの言葉もそこそこ大学をあとにする。大学からアパートまでは徒歩十五分といったところか。大学周辺には一人暮らし用のアパートやマンション、そして下宿が立ち並んでおり、自分のアパートもその密集地帯の端にある。もっと近いところはいくらでもあったが、少し距離を伸ばしただけなのに家賃が思いの他安くてここを選んだ。けして広いとは言えないが、ある程度の防音性もある比較的新しいアパートで、何かと不安の多い女の一人暮らしでもそれなりに上手くやれている。

大家さんは初老の女性で、学生ばかりのアパートの住人をわが子のように気にかけてかわいがってくれるが、ルールにはとてもうるさい。昔は教員だったというのが領けるような、気安さと厳しさがあつた。ペット禁止のアパートで、親切にしてくれる大家さんから隠して飼うことには多少の罪悪感があつたが、それでも最近更に寒さを増してきた外の世界に、一度保護した犬を放り出すことはできなかった。

「ただいま」

練習するように口の中で小さく唱えてノブに手をかけた。出てきた時のまま、何もかわっていませんよやうにという思いと、もしかして自分のいない間にいなくなっていたらという懸念がぐるぐると胸の内を渦巻く。これは帰宅時に毎度のことで、未だに軽い気持ちですぐに扉を開けることができない。自分の家だといふのに、緊張を紛らわせるように一度深呼吸してから、ようやく手に力を込めた。

「ただいま……」

「おかえりなさい」

重たい開閉の音に紛れるような声で、練習していた言葉を繰り返す。首だけ中に入れたところで、奥から現れたその姿に、慌てて全身を室内に滑り込ませた。

「ちよ、ちよっと、出てこないでよ、バレたらどうするの」

お兄ちゃんは一瞬きよとんとしてから合点がいったような声を漏らし、それから囁くようなポリウムで笑った。

「ごめん。でも扉にはあまり近づかないから、大丈夫。みーちゃんも大人しいし、ね」

最後の言葉は腕の中に向けられたものだ。彼の腕に大人しく納まっている子犬は、愛くるしい顔でこちらを見つめてはいるものの、一鳴きもせずただ尻尾だけを元気に振り回している。そつと頭を撫でれば、尻尾の動きはより激しくなり、お兄ちゃんがくすぐったそうに身じるいだ。

「佳奈ちゃんのこと、ずつと待ってたんだもんね」  
片腕で器用に抱えなおし、いい子いい子と子犬を撫でるお兄ちゃんに、思わず長々とため息をつく。

この人は本当に危機感が足りなくて、今までどうしてそれで無事でいられたのかと思ってしまう。そんなだから放っておけないのだろうかと考えて、まるでこの子犬、みーちゃんのようなだと苦笑した。

「どうかしたの」

不思議そうに首をかしげるお兄ちゃんを部屋の中へと押込む。扉は固く閉じて鍵もかけた。見つかる心配はないが、玄関の寒さはまだ癒えない傷に響くだろう。

「いいから入っちゃって」

巻かれた包帯にちらりと視線をやってから言うと、お兄ちゃんはみーちゃんにするように私の頭を一撫でしてから、大人しく部屋の奥に入ってしまった。

「足の傷はどうなの」

気にしていることがバレた気恥ずかしさからぶつきらばうに聞くと、お兄ちゃんは部屋の隅に腰掛けながら難しそうに唸った。

「もう大分良いと思うんだけど、遊びたい盛りなのかな、駆け回りたくてしようがないみたいで」

ちよっと歩かせるつもりが、駆け出しちゃうんだよねと困ったように息をはく。

みーちゃんの右前足に綺麗に巻かれた包帯は、お兄ちゃんが手当てから全部やってくれた。不器用な私と違って解けることも不恰好になることもなく、多少暴れたところで問題は無いが、走り回るとただでさえかかる負担が大きく、治るものも治らなくなる。傷は小さいが、そもそも体自体が小柄なので妙に痛々しい。

「だからずつと抱いてたの……腕、大丈夫なの」

お兄ちゃんの腕に比べて、みーちゃんは負担にもならないほどの小ささではあるが、確かに駆け回りたそうに、飛び跳ねようとしてたり体を激しく動かしている。玄関に出る時の大人しさが嘘のように、今は元気が有り余っているみたいだ。その体を包み込むように宥めるように抱えている腕の片方にも、こちらはやや乱れた様子で包帯が巻かれている。みーちゃんとお揃いの場所にしらえた傷は、みーちゃんのものよりも随分と深く痛々しい。

「ごめんね。早く治すから」

もうそんなに痛くはないんだ。そう言っただけで微笑む顔を見ていると、何故か懐かしさがこみ上げた。滞在を許したのは、この説明しがたい懐かしさのせいだ。私はお兄ちゃんの謝罪に言葉も返さずに顔を背けた。

兄とはあまり会話をしたことがない。放浪癖が無かった頃からも、よくわからないことに夢中になって部屋にこもっていることが多かったし、話しかけてもやつぱりよくわからない答えが返ってきたりするもの

だから、普通の兄弟よりは随分と交流が少なかったと思う。血を分けた兄なのだ、嫌いなわけではない。特別酷いことをされたという記憶もないし、幼い頃に限ってだが一緒に遊んだこともある。ただ、親しく雑談したことが殆ど無いというだけで。だからこうしてお兄ちゃんと顔を付き合わせても、どんな話をすればいいのか私はよくわからないのだ。

しかしこの奇妙な同居も期限付きのことである。言えばすぐにでも出て行くような人に、わざわざ期限を設けてまで滞在するように言ったのは私のほうだ。みーちゃんが随分と懐いていて、引き離すのは忍びなかつたなんて言い訳は卑怯だろうか。懐かしい瞳に捕らわれて、私はお兄ちゃんと隠し事の共有者になった。同居のリミットは、彼の傷が癒えるまで。

「最近隣の部屋、音がするんだよね」

お昼はちゃんと食べているのだろうか。大家さんとかに見つかりたくないだろうか。

そんな風に家のことで頭を一杯しながら学食で昼食をとっていると、正面で蕎麦を啜っていた美咲が物憂げに口を開いた。

「え、でも住んでいる人いるじゃない」

壁が薄いということなのか、夜にやかましいということなのか。騒音は夜型の大学生が多いこの辺の住居ではよく聞く悩みだが、どうもそういう事ではないらしい。そうじゃなくて……と言葉を濁して考える素振りを見せる美咲に、焦れたい思いで先を促した。

「何よ、どういうこと」

「人がね、いない時も音がするの」

「え」

ほんの一瞬頭をひねり、それから考えついたことにぞくりと寒気が走る。美咲も同じ可能性を考えていたのか、いつもよりも顔色が悪い。

「最初はあまり気にしてなかったんだ。いちいち隣の人の不在なんて気にしてないし。でも、最近明らかに誰もいない時に音がするの。隣が外出した音がして、しばらくシンとしてるんだけど、突然かりかりかきつて、引っこくような音とか、物をひっくり返すような音が……」

「ちよつと、やめてよ」

「あはは、ごめんごめん。まあただの家鳴りかなんかなんだろうけどさ。ちよつと気になってねー」

もう十一月だ。怪談をするには向かない時期だというのに、美咲は段々のつてきたのか、わざとおどろおどろしい声で語ってくる。怖がつてみせると力なく笑って謝る様子に、彼女も随分と気が滅入っているのではないかと感じた。それはそうだろう、彼女にとつては自分のすぐ近くのことなのだから。

「もしかして、昨日家に来たがったのもそのせい？」

「ん、まあ。別に害はないんだけど、やっぱり気になるっていうか集中できなくてさ……。すごいくだらない、有り得ない話してもいいかな。妄想癖って、笑わないでね」

気まずそうに視線を泳がせて苦笑する美咲に、もちろん笑うわけ無いでしょうと力強く頷く。食欲がなくなったのか、完全に箸を置いて水を口に含んでから、美咲はこちらの様子を窺うような速度で話し始めた。

「あのね。二週間位前に、隣の大学で人が死んだじゃない」

突然の話題に体がびくりと震える。気にする美咲に何でもないと先を促して、自分も箸を置いた。

「犯人は学生だつていうけど、まだ捕まってるんでしょ。この辺は大学生多いし、隠れやすそうだよなつて思つて、実際警察もこつちまで来てるし」

その事件は、あまりテレビを見ない私でもさすがに知っていた。

隣町にある研究所もくつついた比較的大きな理系の大学で、先日人が殺された。被害者はその大学の学生で、逃走中の犯人も学生で、被害者の友人だということ。同じ年格好の学生が多くて隠れやすさろうということ、少し前からこの辺りでも犯人を捜して聞き込みをしている警察をよく見かけるようになった。

「うちらは文系だし、事件があつた大学とは近いっただけであまり交流もないけど、友達がこちにいるかもしれないじゃない。もしかしたらそれが隣の人で、こつそり匿ってるんじゃないかなつて思つたら、なんか怖くなつちゃつて」

笑わないでねと美咲は言ったが、特別おかしな話ではない。むしろ警察もその考えでこの町での聞き込みを強化しているようだった。同期にも、怪しい人影を見ていないかといったことを警察に聞かれたという人はちらほらいる。大学側はそういった事件に巻き込まれるように警察の動きにあまり良い顔をしていないらしく、表立って何か変わったことはないが、それでも学生の多くがその事件をそれなりに意識しているのは間違いない無かつた。

「でもね、昨日の佳奈の話を聞いて、もしかしたら隣の人も兄弟か誰か来てるのかなつて思つて、ちよつと気持ち楽になつたんだ」

その言葉に、ふともう一つの可能性が頭に浮かんだが、それを口にするにはできなかった。特別なことではないから、言い出しても可笑しくは無いが、言葉の端に動揺が現れないとも限らない。

(犬を、飼っているのかもしれない)

些細な隠し事だ。殺人の指名手配犯を匿つているというよりは、よほど和やかで現実的である。しかしそれを言うには、自分に後ろ暗いことがあるすぎた。

「佳奈、どうかした？」

「美咲の話を考えてただけ。多分恋人や家族がいる

とかそういうことだと思っよ。でも不安なら、遼平君の所に暫くお邪魔してたらいんじゃないかな」

遼平君というのは、佳奈の彼氏で私たちの同期だ。大学まで徒歩三分という大変羨ましい所に住んでいて、よく溜まり場になっていると聞く。どれ位の広さかは知らないが、佳奈一人身を寄せたところで問題ないだろう。

「ええ、うーん：そっだね、そうしようかな」

面倒くさそうに眉根を寄せて呻りながらも、口元はにやけている。そんな微笑ましい姿を見ながら、私はすっかりぬるくなった水を口に含んだ。家のことが再び頭を占めていくのがわかる。

喉がカラカラだった。

「顔色が悪いけど」

アパートに帰ると、お兄ちゃんが心配そうな顔で出迎えてくれた。その顔を見て思わずほっと息を付くなり脱力感に襲われて、自分が思っていた以上に緊張していたことに気がついた。

「大丈夫、ちょっと寒かっただけだから。みーちゃん」

「寝てるよ」

中に入りながら、いつも一緒に出迎えてくれる姿が無いことに気がついて視線をさ迷わせる。こつちだよ、とお兄ちゃんが指差した先で、確かにみーちゃんが丸くなって寝ていた。気持ち良さそうな寝顔に思わず笑いが漏れる。

「何かかけてあげたいんだけど…」

「あ、じゃあこのタオル使って」

使っていないフェイスタオルを差し出すと、お兄ちゃんは利き手じゃないはずの左手でそれを受け取って、そっとみーちゃんにかけてやった。まだ上げ下げが痛むのだろうかどっつい気にしてしまう。じっと見つ

めていると、視線に気がついたのか戸惑うように見つめ返された。

「なんでもない」

何か問われる前にきっぱり返すと、それ以上詮索するつもりは無いのか、僅かに目を伏せてから再びみーちゃんに視線を戻した。

「包帯取り替えてあげないとね」

「あなたのもね」

人差し指で優しく包帯をさすお兄ちゃんに、手にした軟膏を振って見せる。微妙に困った顔をするのは、手当てでいつも痛い思いをしているせいだろうか。みーちゃんの、走り回って汚しても、けして解けないきちっと巻かれた包帯と違い、頻繁に換えているのにぼろぼろになっている悲惨なお兄ちゃんの包帯は、私が巻いたものだ。これでも上手くなった方だと思う、一番最初は巻くというより絡んでいるだけという感じだったし、薬を塗らせてもらった時は傷口に爪を立ててしまった。相変わらず巻き方は酷く、傷を引っかくこともあるが、随分とマシになったと自分では思っている。

「ほら、腕だして」

みーちゃんが大人しいうちに済ませたいのだと急かせば、表情はやや強張っているものの、大人しくこちらに向き直って腕を出す。

「痕、残るかな」

今は大分ふさがったが、それでも痛々しい切り傷に顔をしかめる。薬を塗るのも躊躇われるほどぱっくり傷口が開いていた頃は、直視することができなかつた。

「どうかかな」

大したことじゃないという口調でお兄ちゃんがぼつりと答える。男の人にしてはほっそりとして白い腕にこの大層な傷はアンバランスで異様に目立った。それなのに、全く気にかける風でもなくどこか遠くを見つ

めるお兄ちゃんは、放っておくとどこかに消えて無くなりそうだった。

「ところで、ずっと思ってたんだけど。犬にみーちゃんっておかしくない？」

気まずい沈黙の中で手当てするのがどうもやりにくくて、無理やりに引き出した話題ではあったが、これは常々思っていたことでもあった。子犬の名前を自分では決められずにいたところ、お兄ちゃんが気がつけばみーちゃんと呼んでいて、みーちゃんの方もそれにすつかり馴染んでいた。それ以来そのまま定着してしまつたが、どう考えても犬用の名前ではない。

「普通猫とかじゃないの。みーちゃんって」

「あーそうかな、そうかもしれない」

お兄ちゃんの目が僅かに丸くなる。それは、言われて初めて気がついたというような、あるいはずっと気にはなっていたけれどわからなかつたことがわかつたというような表情だった。

「昔ね、好きな子とこっそり飼ってた犬の名前が、確かみーちゃんっていったんだ」

それでつい、呼んじゃったんだけど、と、空いている方の手でみーちゃんの頭を撫でる。

そんな話は初耳だ。というかお兄ちゃんについて私知っていることは殆どない。色々と突っ込みたかつたが、あまり詮索して構えられるのも怖くて、結局私はみーちゃんの名前に拘ってみせた。

「その、好きな子がつけたの？普通ポチとか付けるんじゃないかなあ」

「今時ポチなんてありきたりな名前もどうかと思うけど」

くすくすと押し殺したように笑うお兄ちゃんに、むっと口を尖らせる。犬なんてこれまで飼つたことが無いから、わかるわけがない。全部完全なイメージだ。自分がつけるとしたらポチか、好きな人の名前でも付

けそうな気がした。カタカナのかっこいい名前が良いなどと思うけれど、いざつけるとなるとなかなか思いつかないものだ。それでこの子犬に付ける名前も決められなかったのだし。

「まあ、もうかなり昔のことだから、その子の名前も犬の名前も、あんまり覚えてないんだけど」

「何それ」

わざとらしく挑発するように言って、にやりと笑う。

「私は初恋の人の名前も、ちゃんと覚えてるよ」

顔はうろ覚えだが、名前は覚えている。それこそ、相手が飼っていた犬とよく一緒に遊んだものだ。

「ゆきちゃんという女の子」

「…ええ、何それ」

同じ言葉を返してケラケラと笑うお兄ちゃんに、頬を膨らませる。同性だって初恋は初恋だ。相手の名前も覚えていない初恋よりはよっぽどマシだろう。そう言えば、確かにと頷いて、でもみーちゃんだったと思うんだよねと頭をひねる。

「何か省略されてるのかなあ…」

みーちゃん、みーちゃん、みーちゃん と口の中で呟きながら、お兄ちゃんは何かを確かめているようだった。おかしいと指摘されると気になるのか、合っている気がするんだけどなあと更に首をかしげる。

「名前、何かと混ざってるんじゃないの」

「何かって？」

「好きな子の、名前とか…」

努めてさりげなく言ったつもりだったが、包帯を巻き付ける手に力を込めてしまった。それでも、力のかげ方が変なのはいつものことだったので、お兄ちゃんが気にした様子はない。大した話ではないのに、何故だか妙に緊張しながら、汗ばんでもたつく手を必死に動かす。チラリと上目遣いに窺ったお兄ちゃんは、遠くを見つめて一生懸命その名を思い出しているよう

だった。

「…さゆり」

ぼつりと耳に落ちてきた名前は、当然のことながら知らないものだった。そういえば、昔近所に住んでいた綺麗なお姉さんがそんな名前だった気がする。お兄ちゃんが好きになつて、一緒に犬を隠れて飼うには年が上すぎるけど、名前をきいてふっと思い浮かんだのがその人だった。彼女には子供心に憧れを持っていたけれど、その顔ももう思い出せない。お兄ちゃんも、その好きな子の顔はすっかり忘れてしまったらうか、それともよく覚えているのだろうか。

「…それが好きな子の名前？」

「うーん…たぶん」

「…ふうん。はい、終わり」

自分でも説明の付かないもやもやした気分を晴らすように、いつもよりもやや大きな手で手当ての終わりを告げる。包帯の巻き終わった腕をべしりと叩くと、お兄ちゃんは一瞬痛みに顔を歪ませてから、ふんわりと笑って礼を述べた。

「ありがとう。今日の巻き方、いつもよりずっと上手だね」

目の前にかざした腕の包帯は、動揺して巻いた割には確かにいつもよりも綺麗に見えた。それでもお兄ちゃんが巻く包帯と比べると酷い出来だ。しかし、どんな手当てでも必ずこの人は丁寧にお礼を言って、それから一つ何かを褒める。消毒が優しかった。薬を綺麗に塗ってくれた。巻くのが早かった。良いところなんて一つも無いような手当てなのに、お世辞じゃないような顔で言うから、勘違いしてしまう。

この人は、悪い人ではないんじゃないだろうか。と。

暦は十二月。何かと飲み会が増える時期で、家のことが気掛かりとはいえ全てを断ることもできず、その

日私は、断り切れなかったサークルの合同飲みに参加していた。会場に来てみると早めのクリスマス会と銘打ったただの合コンで、すぐにでも帰りたいだったが、先輩の手前そうもいかずに腰を下ろした。よく知らない異性を前に、本来人見知りの自分が楽しめるわけもなく、一方的に話しかけてくることに適当な相槌を打ちながら、帰ることばかりを考える。そうしてやっと一次会が終わわり、二次会に移動する流れに紛れて帰ってしまおうと思っていると、急に先ほどまでやたらと話しかけてきた男の人に肩をつかまれた。

「佳奈ちゃんは勿論二次会行くでしょ？」

もう既に結構杯を重ねていた彼は、やや焦点の定まらぬ目をこちらに向けて気の抜けた笑みを浮べた。馴れ馴れしさに辟易しながら手を払って距離を取る。

「ごめん。明日提出の課題やらないと」

「ええ。帰るの？そんなの明日やればいいじゃない」  
遅れてなんぼでしょ、大学のレポートなんて そう笑い飛ばす男に、いつの間にか周りも加わってそうだそうだと肯定の声が上がる。

「でも、どうしても帰りたいから」

「じゃあ和樹送ってやんなよ」

冷たいかとも思ったが、とても二次会に行くような気分ではない。きっぱりと断って今にでも踵を返そうとすると、今度は背後にいた先輩から予想外の声がかかった。

「え、いいです。いいです。近いですから、ものすごく」

「でもほら、例の犯人、まだ捕まってないでしょ。三浦一人じゃ危ないから、送ってもらいなって」

例の犯人。というのは、こないだ美咲が言っていた事件の犯人のことだろう。まだこの町に潜伏していると決まったわけでもないのに、メディアが騒ぎ立てるせいで皆すっかりこの辺りにいるのだと思込んでいる

る節がある。それを理由に必要な無い送りを付けられるのだ、たまったものではない。

「結構です」

「女の子なんだから危ないよ。大丈夫大丈夫、俺結構強いよ」

こちらの返事を完全に無視して、和樹と呼ばれた先ほどの馴れ馴れしい男がぐいと腕を引っ張った。そしてそのまま飲み会の集団から離れてぐんぐんと歩いていく。

「ちよ、ちよと、本当にいいから」

「だーめ。危ないから送って行くよ」

何かあったら困るでしょ。と押し付けがましく言っただけでも突き進むに男に苛立ちを感じながらも、酒が入っているとはいえ男の力には敵わず、引きずられるように付いて行くしかなかった。いつの間にか聞いたのか、アパートの大体の位置と名前は把握しているらしく、時折足を止めはするものの、迷う様子はない。鼻歌を歌いながら今日の飲み会の話をしてくる彼は、特に悪い人という感じではないのだが、それでもこの強引さは全く安心できなかった。

（家の中に、入ってこられたら）

頭を、今朝見送ってくれたお兄ちゃんとみーちゃんによぎる。見られてはいけない。けして、見られては。けれど先刻のように強引にされれば、自分の力では敵わない。風呂場は玄関の廊下と繋がっていて、後はリビングしか部屋がない狭いアパートだ、とつさに隠れる場所もないだろう。最悪の想像に元より殆ど口にしていないアルコールが抜けて行くのがわかる。もうアパートはすぐ目の前だった。こちらの様子などお構い無しで、部屋番号を探す男に必死で呼びかける。

「ねえ、ちよと、ねえ！もう、もうここまでいいから、腕放して」

「なんだよ冷たいなあ。折角寒い中送ってあげたん

だから、ちよとお茶くらいだしてよ」

相当に酒が回っているのか、足元はさほどふらついていないものの、不満げな目元はとろんと眠たそうに細められている。予想通りの展開に焦りつつも、絶対に部屋には入れられないという思いが強気にさせてくれるらしく、私は思い切り男を睨み付けて身をよじらせた。

「離してよ。絶対に部屋になんて入れないから」

「ひつで。何もしないって」

佳奈ちゃんの先輩怖いしと大げさに首を振るも、手を離してくれる様子はない。声を潜めてはいるが、静まり返った夜の住宅街でこのやりとりは目立つだろう。これに気がついて大家さんが、警察が来たらと思うと、一層気が気では無かった。

「ほら、鍵開けて……」

「離してっ」

今にもドアノブに手をかけようとする男を、遠ざけようともがくが敵うはずもない。鍵を開けなければ彼は部屋に入れないが、このままここでこうしていても、誰かに見つかるだけだ。どうしたらいいのだろうか。頭をフル回転させていると、焦れたのか、鞆に手を伸ばそうとした男と距離が縮まる。酒臭さと強引さへの嫌悪感に、とつさに突き飛ばそうと前に押し出した両手は、しかし予想に反して虚空をかいた。

まず最初に、無理に引き離されて背中から地面に転んだ男が見え、それから珍しく焦ったように息を荒けているお兄ちゃんの姿が見えた。痛がる男の小さな悲鳴に被さって、扉の重い開閉音が聞こえ、そこでようやく、お兄ちゃんが部屋から出て助けてくれたのだとわかった。

「なん、で」

「声、聞こえたから」

強張った顔で見つめてくるお兄ちゃんを見て、倒れ

ている男を見て、それからもう一度お兄ちゃんを見た。パニックで震える手で、どうにか自分を庇ってくれた腕を掴む。がちがちと震えて歯が上手く噛み合わない。どうして、どうしてと、そればかりが頭を占めた。

「なんで出てきたのよ」

自分でも驚くほどに小さく押し殺したような声だった。恐れと罪悪感と嘆きと安心。そんな様々な感情がない交ぜになったような表情のお兄ちゃん。きつと私も同じような顔をしているだろうと思った。

「いてえ……何おま、え」

俯いて頭をさすっていた男がそこでようやく顔を上げ、私たちは同時にハッと視線を向けた。男の視線はお兄ちゃんに向いていた。硬直したように動かない私たちを見て、男の顔が段々と青ざめていく。

「う、そだろ」

地面に座り込んだまま後ずさる男の姿に、先に我に返ったのはお兄ちゃんだった。私からも男からも離れるように、一歩下がる。そこでようやく呪縛が解け、私はとつさに離れていきそうになるお兄ちゃんの腕をぐいと引き寄せた。

「待って、お兄ちゃん！」

その声に驚いたのか、男は勢いよく立ち上がり、まろぶようにして逃げていった。その後姿を杳然と見つめるお兄ちゃんを無理に引っ張って、家に押し入れる。そこで初めて小さな抵抗を見せたが、一睨みして腕を握る手に力を込めた。

「従って」

「でも、俺は……」

「従ってっ」

辺りに響かないように気をつけながら、それでも語尾を強めて訴える。一瞬の恐ろしく長い沈黙の後にお兄ちゃんから力が抜け、二人で部屋に入った途端、私の足がぐんと力を失った。

「佳奈ちゃんっ」

冷たい玄関のコンクリートにへたり込むと、やり取りに気がついたのか、リビングの奥からみーちゃんが駆け寄って来た。何も知らないで、家主の帰還を喜び尾を振る様子に、笑いと、それから涙が零れた。ぼたりと太ももに落ちた雫を見て、ぎゅっと握り締められたお兄ちゃんの拳に、私はそっと手を重ねる。

「お願い。もう外には出ないで」

「でも」

「お願い。明日も、明後日も」

出て行かないで。

玄関の暗がりですら懇願するようにつめる私に、お兄ちゃんは口を引き結んで暫く黙っていたが、やがて視線を逸らさない私に諦めたのか、わかったと言擦れた声で答えた。その顔は泣きそうに歪んでいて、私の両目からはもう一粒ずつ涙が零れた。

次の日もその次の日も、私は家を出なかった。大学は丁度週末で休みだったが、休みが明けた次の日も、私は家に引きこもった。携帯の電源も切り、カーテンも締め切って、家の中の空気はまるで葬式のように重暗かった。

複雑な気持ちだった。蹲って怯えているのに、何に怯えているのかわからない。心配するお兄ちゃんを突き放して遠ざけ、それだというのに見張るように視界にその姿を入れ続けた。居なくなるのが恐ろしいのか、明るみに出るのが恐ろしいのかわからない。ただ刻々と時間がすぎ、精神と体力が削られていくのだけがわかった。

「佳奈ちゃん、少しは寝ないよ」

体育座りでリビングの端に陣取って、私は殆ど眠れない夜を過ごしていた。でもそれは、こちらを気にかけるお兄ちゃんも同じことで、伸びた前髪から覗く優

しげな目元にはしつかりと疲れの色が浮かんでいる。無言で首を振るとため息をついて、遊びつかれて寝ているみーちゃんの頭を撫でた。

「テレビをつけてもいい？」

沈黙の支配する部屋で、囁いた声は随分大きく聞こえた。その声に俯けていた面をゆっくりと上げて、お兄ちゃんは薄く微笑む。

「もちろん」

テレビをつけてまず最初に、そのやかましさに顔をしかめた。この三日、テレビは全くつけていない。元々音量を最小にしてはいるが、それでも静けさに慣れた耳にテレビの音はやたらと響いた。画面に映し出されたのは、都心の大型デパートに飾られた大きなツリーだった。キラキラと輝くイルミネーションが画面越しでも眩しい。すっかり忘れていたが、そういえばもうすぐクリスマスなのだ。机の上のカレンダーを見て数えれば、イブが明日に迫っていた。

ちらりと視線をやると、お兄ちゃんはテレビの内容に興味が無いのか、みーちゃんの寝顔を見つめている。その表情は何かを考えているようで、私は再び湧き上がる不安を払うようにチャンネルを変えた。

『…の事故では、二名が重軽傷を負い』

『明日はクリスマスイブです。サンタさんに頼みごとは…』

各局はどこも丁度ニュースの時間で、次々と変わる画面に映し出されるのはどれも似たような内容だった。知らず体に入っていた力を抜いて、落ち着き無くチャンネルを変えていくが、どれもパツとした内容ではない。少し気が抜けて、テレビを切るうとしたその時、最後に移った画面に私の目は釘付けになった。

『…大学の事件の犯人が昨夜未明、逮捕されました』

見れば、お兄ちゃんも信じられないという顔でテレビを見つめている。画面にでかかど映し出された犯

人の顔と名前、逃走中の学生ではなく、白衣に身を包んだ初老の男性だった。

イブの朝、お兄ちゃんが神妙な顔で私の前に座った。私はお兄ちゃんが何を言おうとしているのかわかっていて、あえて彼が何か口にする前に買出しに誘った。

「今日はイブだからご馳走にしたいんだけど、引きこもってたから買い物に行かないと、これじゃあおにぎりしか作れないわ」

だから荷物もちしてよ。そういうと、お兄ちゃんは少しの間を置いてわかったと微笑んだ。

留守番に拗ねてまわり付くみーちゃんを、気の毒に思いながらも引き離してアパートをあとにする。外に出られなかったお兄ちゃんは今も出られるけれど、みーちゃんを出してあげることができない。お詫びにみーちゃんにも、ご馳走を用意しようと思った。

「久々に外出たから寒いや」

「うん、本当だね。あと、眩しい」

目を細めて太陽を見上げるお兄ちゃんを、私も眩しそうに見つめた。昼間に太陽の下で彼の姿を見るのも、連れ立って外に出るのも、これが初めてだった。

「じゃあ、行こう」

「でも恥ずかしくない？」

歩き出す私に、足を止めたままのお兄ちゃんが不安気な声を上げる。何のことかと考えてから、彼の外見のことかと思いついた。元々の顔立ちが悪くないどころか整った方だと思いが、長いこと外に出ていないせいで顔色は悪く、前髪もすっかり伸び切っている。お風呂は貸していたし、服も私がいらない間に洗濯していたようだが、生地がすっかり伸びてみともなくよれているのは誰の目にも明らかだ。

気にしないと言っても本人は気になるのだろう、何度言っても隣を歩こうとはしない。召使のように数歩

後ろを歩く姿に焦れて、買い物物を済ませた後近くの服飾雑貨店に寄り、お兄ちゃんに安いセーターと、自分で用いワンピースを一枚買った。クリスマスプレゼントだと言って渡すと、お返しは何もないとひどく恐縮されたので、代わりに前髪を切る役を請け負わせてもらうことにした。私の不器用さをよくよく知っている彼は少し笑ったが、二つ返事で快諾した。

「話があるんだ」

その夜、クリスマススイブのご馳走を食べ終えて話も尽きた頃を見計らって、お兄ちゃんに声をかけられた。そろそろだろうと思っていた私は、今度はその言葉を遮ることはしなかった。

「ここを出て行こうと思う」

「怪我が治ったのね」

かみ締めるように問うと、口元にゆるく笑みを湛えてお兄ちゃんは頷いた。袖口からいつも見えていた包帯が、今は見えない。その服の下には、まだ癒えない傷があることを私は知っていたけれど、その事には触れずに、みーちゃんの姿を探した。

おなか一杯食べて満足したのか、最初はへそを曲げていたみーちゃんも、今ではすっかり幸せそうな顔をして部屋の隅で寝入っている。よく寝る子だな、名前も含めて猫みたいだ。取りとめもないことを考えようとして、でも失敗した。思わず歪みそうになる顔を、必死に繕って立ち上がる。

時が来た、それだけのことなのだ。

「わかった。その前に約束。前髪を切らせて」

服を買ったときに一緒に買った新品の鏡を見せて、笑う。散髪用のそれではなかったけれど、彼が不満を口にするには無いはずだ。思ったとおり、お兄ちゃんは鏡については何も言わず、ただよろしくお願いますと頭を下げた。

不器用は免罪符にはならない。前髪は人間の外見の中でも特に重要な部類に入っている。私は震える刃先を慎重に噛みあわせては、少しずつ丁寧に前髪を切っていた。ふいにお兄ちゃんの口から吐息のようにかすかな笑い声が漏れる。見やれば、閉じられた両目が薄く開いていた。

「動かないでよ、変になるじゃない」

「ごめん。一生懸命なのがなんだか」

かわいくて。

囁きにジャキツという嫌な音が重なった。それみたことかと気まずい視線を向けると、お兄ちゃんはまるで自分の前髪が見えているかのように笑いを堪えている。

「君のお兄さんにしてくれて、嬉しかった」

最後の一房を切り終えて、毛先を払う。震える長い睫が綺麗で、改めて兄とは少しも似てないなと思った。

「似ていたからね、それだけだよ」

「それでも、感謝している」

ゆつくりと、眠り姫が目覚めるような速度でお兄ちゃんが目を開ける。

物語の終わりが近づいているのを感じながら、私はあの始まりの日を思い出した。

寒空の下で犬を拾った。

アパートの階段下、怪我して震えている子犬と、それを腕に抱きかかえて気を失ったように動かない大きな『犬』、それがお兄ちゃんだった。

通報しようかと携帯を握り締め、それでも刺激を求める毎日に突如現れた非日常に、思わず恐怖を忘れてじりじりと近づいてしまった。そしてゆつくり開かれた彼の目はとても悲しげで、何故だか妙に懐かしく、気がつくとも手を差し伸べていた。

子犬は生まれたばかりの捨て犬で、大きな『犬』は海斗と名乗った。苗字は教えてくれなかったけれど、その顔を見ればわかる。彼は連日ニュース番組を俄かに騒がせている人だったのだから。

「得体が知れないどころか、危険人物だ。それを匿うなんて、正直最初は、何て危機感が足りない子だろうと思ったよ」

前髪の様子が気になるのか、指先で払いながら笑うお兄ちゃん、海斗に、私も同じことを思ったんだけど、と心中で悪態をつく。いつもいつも玄關先まで出迎えてくれて、なんて危機感の無い人だろうと思ったものだ。彼はお尋ね者だというのに。

「仕方ないじゃない。失踪した兄に似た人が傷ついて倒れていたら、最初はもしかして思うし」

寒い地面から動こうとしない海斗をよく見ると、自身も怪我をしていて出血の多さから力が出ないようだった。それで手を貸してとりあえず部屋に入れようとすると、当然のことながら頑なに拒否された。警察を呼ばれると困るのだろう。しかしこうしていても彼の体力は失われていく一方だし、いつ誰に見つかってもおかしくない。その時は何故だか、この悲しげな男を誰にも発見されたくないと思った。それでとつさに兄に似ていると嘘をついて、半ば強引に部屋に連れ込んだのだ。

「でも、君はお兄さんじゃないとわかってても通報しなかった。似ているからというそれだけの理由で、匿ってくれた。何も聞かずに」

何も聞かなかったのではなく、聞けなかったのだ。その事に触れると、この人は簡単に消えてしまうような気がしたから。

「余計な事言つて。偽者とはいえ、ようやく再会できたお兄ちゃんを失いたくなかったからね」  
せめて傷が治るまでは、お兄ちゃんのふりをしてほ

しい。

いつ隙をみて通報するかもしれない私の言葉を鵜呑みにして、兄弟ごっこに付き合ってくれたこの人だつて、やっぱり相当に危機感が無いと思う。掴みどころも隙も無かった兄とは違って、この人は本当に温かく純粹で、隙だらけの優しい人だった。

「感謝してもしきれない。おかげで今、こうしていただける……」

持っていた鉢を置いて、髪を受けていた新聞紙を丁寧に折りたたむ。そして改めて正面から見つめると、海斗は深々と頭を下げた。

「ありがとう、あの日見つけてくれたのが、君でよかった」

終わりに、この人は必ず丁寧にお礼を言つて、それから一つ何かを褒める。手当てを終えたときも、料理を振舞ったときも。いつもいつも。優しく、温かくて、律儀なその言葉に、私はこの奇妙な同居の終わりを知った。

次の日、目を覚ますと海斗の姿は無かった。

部屋は寝る前と何も変わらなくて、置手紙の一つも見つからない。転がるように走るみーちゃんの姿もなかった。

わかつてはいたことだけ悲しくて、膝を抱えて蹲る。

事情なんか何も知らなくてよかった。その悲しげな瞳を放つて置けなかった。助けてあげたかった。でも本当は、ただ刺激が欲しくて、ただ一人が寂しくて、懐かしい気分させられる優しい彼と、一緒にいるだけで救われていたのは自分のほうだったのだ。

「あのね、本当は、失踪した兄に似てるって、嘘だったんだよ」

兄は相変わらず連絡が取れないが、今は北京にいる

はずだ。つい先日、暢気でそっけないメールが届いていた。兄は、物心付いた時からさっぱりしていて兄弟とはいえ一定の距離感のある人だった。そんな兄のことを、親しげにお兄ちゃんなどと呼んだことはない。だから兄に似ていると嘘をついて引き止めたところで、彼を兄だとはどうしても思えなくて、自分にも嘘をついた。この人は兄じゃない。でもお兄ちゃんなのだ。

偽りの日々だったけど、彼は本当に理想の兄のように優しく心配性で、良いお兄ちゃんだった。お兄さんにしてくれて嬉しかったと彼は言つたけど、妹にしてくれて嬉しかったのは私もだ。

でももうそれも終わり。非日常は跡も残さずに消え去つて、後には変わらぬ日常が巡るだけ。

膝を抱えた腕を解いて、立ち上がる。そうして私は、日常の再開の一步を踏み出した。

「で、調べてみたらこっそり飼っている人が三人も見つかつて、結局古いマンションだしってことで、ペットOKになったの」

遼平君の所に身を寄せていた美咲は、いつの間にかマンションがペット可になっていたのだという話を大笑いで語つた。どうやら隣の部屋の物音は隣人がこっそり飼っていた猫の音だったらしい。実家で飼っていた猫が恋しくて、つい連れてきてしまったのださうだ。蓋を開けてみると何でもないことで、あんなに青ざめていた美咲の表情はすっかり明るい。でもおそらく、当人にすれば見つからないようにと随分神経をすり減らしていたことだろう。周りには些細な出来事でも、当人にとっては大事。事件というのは、どんなものでもそういう色を帯びている。対岸の火事より近くの小火、だ。

あの日酷い目に合った和樹君（でも謝る気はない、

こちらだつて酷い目にあつた）に、久々に大学で会つた時はさすがに構えたが、出会い頭に両手を合わせて謝られた。

「いやー、ごめんごめん、しばらく佳奈ちゃん風邪で大学来ないし、あー具合悪かつたんだー、なのに悪いことしたなって、めっちゃ反省してたんだ、ごめんね」

飲み会後の欠席は風邪ということにしている。あの日の頑なな拒否も、具合が悪かつたせいだと思つていいのだろうか。お兄さんにも悪いことしたね、と頭を下げてきた。

「ていうか、あの時はめちゃくちゃ酔つてたみたいでさ、お兄さんのこと一瞬、えーとなんて言つたっけ、あの指名手配犯？逃走犯？かと思つて、みつともない所見せちゃつた」

照れくさそうに笑う和樹君は、軽くて馴れ馴れしいところはあるものの、やっぱり特別悪い人という感じではない。こちらこそごめん」と謝ると、すぐに許してくれた。

「でも犯人あのとすぐ捕まつて、良かったよなあ」

「逃走してた人じゃないけどね」

「え、マジで？佳奈ちゃん詳しいね、ニュースとかちゃんとチェックするタイプなんだ」

偉いなあと笑う和樹君に苦笑する。犯人が誰か、なんて所詮は関係ない人たちにはどうでもいいことなのだろう。メディアもそれまでは散々犯人と逃走犯の関係をドキュメントにして流していたのに、逮捕後はいくつかの番組で真犯人の犯行動機が明かされ、あとは少しも報道されなくなった。捕まつてしまえばこうも興味を失つてしまえるものなのだろうか。

犯人は大学の教授で、大学付属の研究所で助手をしていた学生に不正を知られて犯行に及んだ。その時の

目撃者が逃走していると思われる被害者の友人で、罪を被せられていたが、警察の調査で教授の不正が明らかになり真犯人は御用となった。

明かされた真相は陳腐でそつけないものだったが、それでぼろぼろになった人を見ている者としては納得のいかない事件の最後だった。それでもきつとあの人はいくら救われたのだと信じたい。息絶える寸前の友人から託されたというチップが、逃走犯改め目撃者の手から警察に渡り、余罪が次々と明らかにされたという記事を読んだのは、それから更に一ヶ月たってからのことだった。

三月、新一年生と卒業生の引越してトラックの音が絶えない中、私も心機一転、住まいを変えた。

大学までの距離も利便性も殆ど前のアパートと変わらないが、今度のアパートではペットが飼える。

引越しをきっかけに、近くのコンビニでバイトも始めた。講義数も少なくなることだし、生活が落ち着いたら、犬を飼おうと思っている。もう物音がするたびに玄関に走り寄りなくていい代わりに、犬の世話に忙しくなるだろう。そんな近い先のことを考えると、つまらなかつたはずの日常にわくわくした。

それでも時々考えてしまうのは、いなくなった『お兄ちゃん』とみーちゃんのことだ。

バイト先に向かいながら、ふとすれ違う人の中に彼の姿を探してしまう。

あの偽りの日々は楽しくて、でも辛いことの上になりたっていた。そう考えると今は彼にとっても私にとっても、何の懸念もない平穏なのだろうけれど、やっぱり寂しいと思ってしまう。

何となく力が抜けて、その場にしゃがみこんで顔を伏せた。吹き抜ける風は少しずつ暖かくなっていて、

何もかもが開放的に芽吹き出している。あの、寒い外の世界から必死に隔離した空間は、もう遠い夢の話のようにも思えた。

考え出すと思わずこみ上げてくる涙をぐっと堪える。そして立ち上がるうとしたその時、何かが手の甲をべろりと舐めた。びくりと体を震わせて顔を上げると、正面にちよこんと座った犬が、くりくりの黒目でこちらを見つめている。記憶にあるよりも幾分大きくなったその姿に、恐る恐る、確認するように声をかけた。

「みー、ちゃん？」

呼び声に応えるように、尻尾を千切れんばかりに振って飛び掛ってくる毛むくじらの体を受け止め、ハッと息を呑んだ。そこには、相変わらず綺麗な結び目で赤いリボンが括り付けられていた。誰が結んだのかなんて、聞かなくてもわかる。震える指先でリボンに触れると、そこに小さい字で何か書いてあることに気がついた。焦りながらも、興奮して暴れる犬からリボンを取ると、そこにはリボンの端から端にかけて几帳面な字で、メッセージが書かれてあった。

『この子の名前はさゆりさんにしましょう』

「…は？」

予想していた内容とかけ離れた書き出しに、困惑しながら読み進めていく。まるまっっている先を伸ばしながら読んでいけば、信じられない内容に、思わず否定の音が漏れた。

「嘘、だ…」

『この子の名前はさゆりさんにしましょう。俺が間違えていました。初恋の人は、みーちゃんというあだ名の二つ下の女の子でした。ちなみに、俺はその子からゆきちゃんと呼ばれていました』

「名前を間違えていたのと、性別を間違えていたの

では、どちらが酷いと思う？」

忘れもしない声が降ってきて視線を上げれば、堪えていた涙がほろりと零れ落ちた。

「何それ」

挑発するように、言えただろうか。涙でかすむ視界の中で彼が優しく微笑むのが見えた。

ねえ、貴方にたくさん言いたいことがあるよ。

家を引越したの。もう隠さなくても犬が飼えるわ。

兄に似ているなんて嘘。お兄ちゃんとしては最高だったけど、これっぽっちも似てなかった。

本当はね、ただ懐かしくて懐かしくて、ずっと不思議だったけど、今ようやくわかった。

初恋の人に、似ていると思ったんだね。

ありがどうの言葉で終わった日々を、また始めよう。

今度は何も隠さずに。

今度は何の、嘘もなく。

優しい優しい、日常を。

(かとう あゆみ・旭川校四年)